

大正六年

(二月)

一月一日 癸卯 月曜 晴朗、無風、夜九時頃より雨ふり出したり。

朝五時起。天地神明に拝し、祖先仏前を拝み、本日より例とす。小石川に学校を移してより年々学校にて式を致せしか、本年よりわか住宅にて椒酒、雑煮を祝ふ。予、李子、静子、寿子、土井田鶴、井上八重子、朝倉、雨宮の八人也。賀客、石山みさを、基春、姉小路伯、浦五十吉、石山基たけ(威)、葉室伯。  
発信 年賀状は(端)書、式百三十枚出ス。

一月二日 甲辰 火曜 雪積る事三寸余、実にはつ雪の銀世界となりたり。いよゝ御国の幸おもふへし。

朝五時起。神仏に拝する事昨の如し。わか宅にて昨の如く雑煮を祝ふ。賀客も、とてもとおもふ横浜石川範三氏、酒井忠克。試筆はじまる。予老松に蛇、李子遠山雪、田鶴子帆船二、井上八重子 鴉三羽、外に宝珠玉二箇、笑門 静子、福来 寿子。予、紕地額面、祥雲瑞靄二枚、知足二枚、揮毫ス。

きのふまで遠山にのみかゝりたりおもはぬけさの庭のはつ雪

一月三日 乙巳 水曜 天晴朗。

朝五時起。予はしめ一同、雑煮を祝、如昨。続々賀客来る。正午より、予、年礼に廻る。閑院宮様、東宮御所、竹田宮、朝香宮、北白川宮、華頂宮え参る。皆御祝酒いたゞく。日暮に成て帰。帰途新田え寄て帰。跡見泰、夜、弘、年礼に来る。

一月四日 丙午 木曜 晴。

朝より賀客にていそかし。

一月五日 丁未 金曜 晴。

日々賀客来る。午下四時より築地精養軒に行。石川静江、養子入賀にて結婚披露会に列す。前余興数番ありて食堂開け、八時頃退散す。

一月六日 戊申 土曜 晴。

一月七日 己酉 日曜 晴。

朝七草の粥を祝ふ、如例年。予、土井田鶴子と観世会二行、夕景帰。

一月八日 庚戌 月曜 晴。 予記 有約、橋場三条家えに〔衍〕行。  
学校始業式執行。九時、校長職員生徒一同着席。

第一 君か代唱歌

第二 勅語拝読

第二〔三〕 校長演舌

第三〔四〕 主事に替りて齋藤菊寿氏演舌

第四〔五〕 李子、生徒えのはなし

式全畢。余興福引、例の広庭にて青竹を結廻らして、中に景物をかさりて、一時に七十人ツ、めんないにて唱歌に連て福を引く。数七百余占、全畢。三河万歳の余興面白く、十二時過済。午下二時より橋場三条資君様え。当日、閑院宮兩殿下成らせられる。予、御培〔陪〕食仰付られ、種々他人交らす面白き御雑談のみにて、夜八時還御。此時、予も退く。今夕、月食。

一月九日 辛亥 火曜 晴。三十四度、寒甚し。

業始をなす、朝より昼迄。午下早々、予、年礼に廻る。大谷伯、黒田侯、九条公、橋岡氏え行。

一月十日 壬子 水曜 晴。

毎朝水道の線〔栓〕氷付。課業例の如し。

一月十一日 癸丑 木曜 晴。

課業例の如し。

〔二月十二日〕三十日、記載ナシ

一月三十一日 癸酉 水曜 晴。(寒)甚し。毎朝水道の線〔栓〕氷て、熱湯にて水出す。

〔二月〕

二月一日 甲戌 木曜 晴。

朝、課業例の如し。

二月二日 乙亥 金曜 晴。(寒)甚し。 予記 兩陛下、葉山御避寒、行幸啓あらせられる。

朝より金曜生稽古する。本日より松平岳子さま御出に相成、御稽古する。十一時済。午下、課業例の如し。卒業製作の稽古する。午下四時頃より棚橋絢子刀自來られて、久々に謡をうたふ。百万と葵上と二番、七十九と七十八と、老嫗たかひに声をはり上げて、老鶯の今としのはつ音うたうたり。種々面白きはなしに時を移して、九時帰りぬ。

本日午後三時十五分、横浜の大爆発、惨事。海岸通りの商品倉庫自爆、八棟全焼し、附近の被害夥敷、重軽傷三百余名。号外出ル。横浜知人一同見え見舞出ス。

二月三日 丙子 土曜 晴朗。(寒)甚し。予記 竹田氏来る。

朝十時より芝万里小路伯の病を問ふ。発病より今日で一周(週)間にて、熱度と(も)七度四分と下りて、大に御気分もよろしく、皆々大悦、小川医師も診★(目+察)(察)して大悦、先々一息致したり。十二時過帰。帰途新田えよりて、まさ子の病気を問ふ。退院いたしたり、日々医師え通ひ居るよし也。房州跡見より端書と鯛と着。直二返事する。来客、賀茂富子。夕景より豆まきにてにきはし。

豆の数七十の八とたうへきて百とせまては廿三年

上海津田弘孝、弘精よりキヤラメルの御礼状着。毎夜月清し。

受信 夜九時過、酒匂藤井氏より端書着。三条公の開校祝辞、今(一)応さかしてくれと云。

発信 房州いく子え、山中秀子え、藤井え返事。

二月四日 丁丑 日曜 晴朗。

朝九時より觀世会二行、内海寿子を連て。橋岡竹生島、義(喜)之丞ひら、家本(元)籠太鼓、よく出来ました。元義鉢木、久々にて芸も上りたり。切の氷室は見す(ず)て帰。李子、万里父の病を問ふ。肺炎ハほとんどよけれど、心臓がケンノン(險難)とて、博士二人、学士とも相談をこらしたる由也。十三夜の月、如鏡。棚はし(橋)絢子より、朽木の観音と其書画帖及禅勝寺の観音之画、依頼の絹本と来る。

二月五日 戊寅 月曜 晴朗。

朝、課業例の如し。

二月六日 己卯 火曜 晴朗。

火曜生の稽古する。

二月七日 庚辰 水曜 晴。予記 石山基陽氏約束。

朝、課業如例。十二時より河田氏え行、帰途石山え寄。基陽氏、すま子と三人にて三井寺、百万を謡ふ。后、仕舞、つゝみ等にて夕景五時帰。万里伯様、病氣少し見直したり。

受信 上海津田より寒山寺の石摺もの三枚着。

二月八日 辛巳 木曜 晴。

朝、課業例の如し。揮毫ものス。午下四時過より、予、雨宮連て帝劇え行。森律子より招待にて。

はじめ 他人の子、西洋の暁（焼）直し、あまり趣味もなし

第二世の中

第三 積恋雪の関の戸（扉）、松本幸四郎 関兵衛、律子 墨染、奇麗によく舞たり

第四 婦人銃獵家、喜劇

十一時済て帰。

二月九日 壬午 金曜 曇晴。少し雪ちらつく。已而止。

金曜稽古日にて、昼迄。午下、五年二組教授する。李子、万里家え行。

発信 穴倉と山中え返書。

二月十日 癸未 土曜 陰。寒甚し。

朝十時より、予、上野香風会二行。朝の事とて看客も少なく、よく見られたり。一室より第六室の岡田三郎助 桃の花、藤島、小林鍾吉、岡野、長原、黒田先生、小林万吾、跡見泰、中沢、山本森之助、此処大に見もの也。コウシ遺作品をみる。なる程名人の画にて、其品位の高き事、感佩之外無之候。第九室までみて帰。寒気甚しく、たち通しにてハたまらずして帰。午下、揮毫す。

二月十一日 甲申 日曜 晴。

終日、揮毫ものス。

二月十二日 乙酉 月曜 晴。予記 帝国ホテルニ於テ本野夫人招待会、午下六時より、

会費三円持参の事。東洋婦人会。

課業例の如し。

（二月十三日〜二十一日、記載ナシ）

二月二十二日 乙未 木曜 晴。四十度。予記 竹田氏。

課業例の如し。午下早々、揮毫ものス。来客、内海氏、週施（周旋）にて指紋学会よりの指文（紋）原紙に指紋を押ス事。

受信 静岡県由比町角田年弘より興津鯛十枚着。

二月二十三日 丙申 金曜 晴。四十度。

朝より研究稽古日、昼迄。午下早々、揮毫ものにかゝる。尺八豎物、墨竹之図。同御殿場之富峰。来客、村井吉兵衛、同薫子、結婚之御礼に来る。受信 酒井伯より若狭小浜の生干物到来。

二月二十四日 丁酉 土曜 晴。  
朝より尺八豎もの揮毫ス。

二月二十五日 戊戌 日曜 晴。  
朝より尺八絹本

豎もの揮毫ス。彩色桃柳之図、瀑布紅葉之図。来客、梶山氏 井戸掘、四月九日、増田浪江。野田操、病氣見舞出ス。

二月二十六日 己亥 月曜 晴。 予記 玉玲会不参。  
課業例の如し。午下、銀地二枚折屏風、四君子落成。来客、岩浪稲子、安藤子家扶井上、御産信ユキ様御宮参り二付、鶴の子餅、松魚大箱。来客、岩浪稲子、久々にて咄し合て、御合のものなど、予、李子と共にして、日暮て帰られたり。

受信 横浜三ノ谷原太三郎より案内状。此度、高橋捨六御夫婦の媒酌にて、富太郎二女照子と結婚相齊ひ、三月五日午下五時、山下町グラントホテルにて披露会。

発信 静岡由比町角田氏え小包、藤井瑞枝え返事。

二月二十七日 庚子 火曜 雨。

昨夜より待かねたる雨ふり出して、静なるはる(春)雨終日ふり通したり。世間、雨喜ひの声、草木も漸生帰(返)りたり。予ハ日々水やりにていそかしかりき。火曜研究稽古日、昼迄二済。前日より揮毫の画みな落款ス。来客、佐々木豊子。

受信 葉山大炊御門よりなま干のいわし一籠。

発信 直二家政氏え端書返事。

二月二十八日 辛丑 水曜 陰。

課業例の如し。午下、銀地二枚折富峰之図揮毫ス。夕景、相川来る。絹本八枚屏風一雙渡ス。来客、日比野雷風来りて面会ス。云、天下の一品、昨日手ニ入候、御覧ニ入度と申。軸もの万山疊嶂之図、予はたち(二十)代、西成之時代かきたる者(物)、三百円ト云、是も人の手に渡してはとて、直ニ二百五拾円ニテ買入、昨夜ハ寐られぬほど嬉しかりしと申候。来客、神木猶之助氏、不在にて不逢。此人贈物二付、請へきものにあらずとて、反物一返礼ス。

発信 越後白井瑞清え品物トは(端)書出ス。麴町小松重春え短冊返却。

(三月)

三月一日 壬寅 木曜 晴朗。(寒)甚し。 予記 竹田氏。  
朝より原太三郎、照子の結婚二付、御祝品緋紋羽二重一反、白羽二重一反、松魚大箱、扇子一对、使にもたせる。神木氏え無地高貴織拾三円五拾銭也を小包にて贈る。  
受信 日比野雷風より絹本一枚桜の図。

三月二日 癸卯 金曜 予記 愛国婦人会記念式、午下二時、富士見軒にて。

三月三日 甲辰 土曜 予記 笹川臨風君より御雛様に招かれる。

三月四日 乙巳 日曜 予記 観世会行。

三月五日 丙午 月曜 予記 原太三郎、照子之結婚披露会、午下五時、山下町グランドホテルにて。

(三月六日〜十一日、記載ナシ)

三月十二日 癸丑 月曜 晴、后雨。

画の製作二而、午下〇時より絹本に絵をかゝけ(二せ)たり。四時迄引つゝきて見る。如約、小川直子刀自來られる。居間にて種々かたり合、御合のものなど出して、ゆる〜と日暮迄。小伝馬町別院にて故安井大僧正之御法事なれと、参詣御断ス。

三月十三日 甲寅 火曜 晴。

朝早々、人を竹田氏え遣して、八時頃竹田氏来りて療法してもらい、先々いたみとまり、終日就辱(二褥)ス。両陛下御還幸、天氣ハ実にくらゝかなる春の日にて、御汽車中所々の気しきを愛て給ふらむと御察し申上らる。庭の松竹梅の大盆栽之梅、二りん始而花開く。昨十一月よりつほみ出て、日々楽しんで(ママ)見る。漸花の開く時来りて嬉しさい(二言)はん方なく、此盆栽ハ先帝陛下の御愛翫遊はされし御物にて、昨年ハ花一りんも不付に、今年二花付たり。枯木の惣枝などすへてくち木にて枝ぶりなど面白く、是にて水を上げるは実に真理のうちの真理なり。  
房州より治子、幾子、帰京のつもりいたしたれと、いまた電報いたらす、いか〜と思ふうちは(二端)書着、都合により明十四日に立帆(二出航)と云。

三月十四日 乙卯 水曜 雨。

朝房州より電報着。一番にのつた、あとみと云。本日も微恙にて休業。如約、実業の日本社より井上質夫来而面会ス。

三月十五日 丙辰 木曜 予記 奠都五十年奉祝祭祝日、午前六時迄ニ上野え、招待。  
(コノ日、記事ナシ)

(三月十六日、十七日、記載ナシ)

三月十八日 己未 日曜 彼岸の入。晴。

(三月十九日、二十日、記載ナシ)

三月二十一日 壬戌 水曜 陰。

朝より春季皇霊祭ニ付祖先祭執行ス。神饌供物こしらへて参拝、一同。中野より寿子も来る。

三月二十二日 癸亥 木曜 晴。

朝、墓参して帰。揮毫ものス。吉 (空白) 此度辞職ニ付、送別会執行、教員一同、教員室にて午餐。御すもし、御吸物、御菓子位にて相済。来客、鳥尾智勢子。昨日のなをらひにて御すもしをこしらへ、一同戴く。此時玉枝も来られて。

受信 三月十七日出、満韓国境よりは(端)書着、跡見弘。

三月二十三日 甲子 金曜 晴。

治子、幾子、中野え行。午下、中村元嘉氏え蘭の盆栽をたのみたるニ付、御礼ニ行。雲雀山一番謡ふて、直ニ万里伯を問ふ。御病氣大全快と申位よろしくて、暫時咄して帰。

発信 穴浦和子え。

三月二十四日 乙丑 土曜 雨。

終日揮毫ものス。来客、五島万千代、春田氏細君と其娘 此度入学許可ニ付御礼ニ来る。午下五時より橋岡氏研究会ニ行、高砂の先少々と鵜飼一番。

三月二十五日 丙寅 日曜 晴。 予記 竹田氏来る。  
朝より揮毫ものス。

三月二十六日 丁卯 月曜

受信 三月廿二日(付)本日ハ(端)書着。跡見弘、京城より。

(三月二十七日、記載ナシ)

三月二十八日 己巳 水曜 晴。予記 高田慎蔵宅にて不動会、午後二時より五時迄ニ。本日ハ卒業生謝恩会執事。午前十一時案内にて、習字教室に食生(堂)開かれ、中天亭の洋食にて卒業生八拾人よりのもてなしにて、結構なり。畢而裁縫教室に舞台出来たり。卒業生の芸尽し、中々思ひの外感し入たり。予、三時より高田氏へ行、先弘法大師の御筆の不動の大軸、其外にも名画、或ハ絵巻物なども珍らしきもの沢山に拝見して、庭ニ出て摸キ(擬)店にて所々にて遊ぶ。寺内総理大臣も御出に相成、大雑沓。四時過帰。

三月二十九日 庚午 木曜 晴。予記 愛国婦人会、午後一時半より総会準備委員会。朝四時より起て、治子、いく子、帰房準備なる。李子、霊岸島迄送る。先無事ニ乗船する。

三月三十日 辛未 金曜 晴。

午後より横浜原氏へ行。主人不在、安子さまニ面会して、昨日、学校地所議請、愈取引相済たるを、全く富太郎氏之尽力にて、原銀行より借請る事に相成候。委(悉)皆相済たる御礼を懇ニ申のへて、ゆるく閑談して、夕景帰。

三月三十一日 壬申 土曜 晴。

朝十時より代々木久米氏を問ふ。民之輔に逢ひて、久々家事之事共語り合、昼飯を呼れて、五島万千代も夫の国え父の仏事を勤に行、不在中也。それより大炊家政氏の病を問ふ。ほとんと全快の様子にて、久々咄し合て、師前君えも訪問して、夕景帰。李子ハ残りの子供等其外八人連にて吉田園へ行、夕景帰。来客、主事大束氏ニ面会ス。受信 幾子より無事着は(端)書着。

(四月)

(四月一日、記載ナシ)

四月二日 甲戌 月曜 晴。

朝、白石文の母(以下、記述ナシ)。風間氏と日本弘道会御断欠席。出雲北脇氏、佐渡古藤氏、岐阜森繁一、揮毫断。来客、多田母と女と久々にて面会ス。牧静子其母と。発信 山中秀、石井初。

四月三日 乙亥 火曜 晴后雨。予記 日本弘道会、地鎮祭終了後、午下六時、華族会

館にて懇談会。

来客、倉島富久、金子菊子母、中井つか子の母 予画軸二幅持参して箱書付を乞、中野寿子。朝五時後、下婢かく帰房す。昨日房州よりかくの母、物干より落て大怪我をしたるとて直二帰れと云電話にて、取敢す帰房させたり。

受信 房州いく子より。

四月四日 丙子 水曜 晴。 予記 竹田氏来る。

来客、徳岡政子娘と、閑院宮老女田尻幹、京都松林院大僧都神谷俊衛。正午より河田氏え行て帰。

受信 土井田鶴子より。

四月五日 丁丑 木曜 陰晴。

朝、散歩して、所々の花をみて帰。庭の花も咲出てたり。十時過より車にて女子大学校へ行。本日ハ皇后陛下行啓あらせられる二付、余等も招待と(を)受けたり。新築家政科にて拝謁仰付られたり。諸教場御順覧あらせらる。予、棚橋とハ退場致して玉枝方え行。それより山田としを、板垣細君、和田春子、大屋木幸など電話にて呼よせ、皆来る。熊野 予、棚はし(橋) 山姥、藤戸 山田、桜川 大やぎ、百万 予、仕舞などもありて、九時帰。月清し。

四月六日 戊寅 金曜 晴。

朝八時集る。始業式。講堂にて古生徒に業始の挨拶ありて、新入生と初対面の挨拶ありて、古生徒ハ各教室ニ入ル。新入生講堂に参列して、校長の演舌、主事之咄し、李子よりハ父兄及新入生の心得へき咄し、懇々とありて、式畢。昼迄にて済。午下、箱書附、及揮毫ス。来客、長倉の母。今夜十五夜にて月尤よし。予、李子、ヒーさまと月見ながら散歩して帰。来客、京都松林院神谷氏ニ面会ス。

四月七日 己卯 土曜 晴。七十度。

朝六時電報、アスロンチエツク、久岡朝子。是ハだしぬけにて、今朝東京駅着二付、迎ひの者出し候ひまもなく。学校は本日本体格験査に取かゝる。十一時頃、久岡朝子只壺人にて着。先々久々にて互に顔をみて悦ふ、甚し。来客、実業之日本社原達平、御国の歌の山科凌雲、安藤恭子女王様成らせられる。夕景より雨になる。夜更て月清く昼の如し。

四月八日 庚辰 日曜 晴。

本日ハ約の如く、予、李子と久岡麻子を連て、万里小路伯え行。公園入口にて伯様御迎ひに逢て、共に公園の桜花をみる。満園みな花七分通り、丁度見頃にて行樂しつゝ花をみる。万里家にて御病氣御快復の御祝らしく、伊勢忠の御料理にて大御馳走なり。夜八時過帰。月清し。

四月九日 辛巳 月曜 晴。 予記 生徒体格検査。  
朝より揮毫ものス。村井氏を問ふ。京都市にて不在。閑院宮え詣して、御息所様に拝謁して、今夕七時に京都え御出発、御庭の花拝見す。昭憲皇太后御三年御祭典二付、本日より庭の辰巳の方ニ井戸掘はしめる。

四月十日 壬午 火曜 晴。 予記 生徒体格検査。  
本日より火曜稽古はしめる。

四月十一日 癸未 水曜 晴朗。 予記 高井戸吉田園にて泉会野外講演会。生徒体格検査終畢ス。

朝九時より生徒式場に集め、憲昭（昭憲）皇太后御三年祭典、遙拝所を設ケ、校長参拝、職員一同、生徒一同の参拝アリテ、式畢。十時半より、予、李子、久岡氏も連て、新宿追分迄行、こゝにて会合ス。それより買物、電車にて下高井戸に行、集る者八十余人、其外百人ト云。園主床に憲昭（昭憲）皇太后の御霊を祭りて、御供物などさゝけ、校長はしめ参拝、其外会員一同参拝ス。一同御持参の御弁当、園主よりの竹の子御飯、絹かつ（衣被）きなどにて食事ス。昨年此園ニ来りて会する者一同の合作絵を右に刻して、此度其碑を建設せり。見事に出来たり。此園中昨年よりハ又々広く手入して、園遊会に尤妙也。二時過、人類学者鳥居竜三（蔵）君をへい（聘）して、この武蔵野の以前四千年の人類状体（態）の講演あり。この地下より掘出したる石器時代のもの甘藷ほど、丁度適当したる御咄しにて、尤妙々也。それより竹の子ほりや筆草つみに、大興したり。五時より除（徐）々に退散する。予等は六時より此行樂に一日の遊興にくらしたり。

四月十二日 甲申 木曜 晴。

朝より授業にかゝる。来客、生徒の父南雲善左衛門氏、田中みつ、娘の入学願に来る。例に依て断。庭の一本桜、本年ハ咲たりな咲たりな、実に見事なる花也。

発信 本日、館山跡見え羽織小包にて出。鶴見氏、結婚披露会断る。

四月十三日 乙酉 金曜 雨。

石山基陽氏え二三子初節句の御断出ス。基威氏え泰の事願込たり。同氏、横浜来栖荘（兵衛氏葬送代理頼ム。午下より、予、李子、久岡麻子、帝劇え連ル。金曜会、稽古はしめる。発信 浅草婦人会、稲田行、断。会津若松日下礼子え出。

四月十四日 丙戌 土曜 晴。

課業例の如し。久岡麻子、明日愈帰国出發二付、又雨宮信女も七年間よく寄宿舎につとめくれたれハ、今夕別宴を設けて、日比の勤務を慰めたり。晚餐を予、李子とも、八時過済。

清水連郎より訃音着、母美喜死去にて明十五日午前十時葬儀執行のよし。驚入候。

四月十五日 丁亥 日曜 雨。朝六時過比よりふり出してたん／＼とふりしきる。予記  
洪沢男結婚披露会、午下二時に、欠席。久岡麻子出發。

朝四時起て出發の準備して、予、李子も東京駅迄送る。跡見玉枝同行にて大ゐに安心す。  
麻子も滞留中、日々大悦にて先々病氣もなく、無事出立致し候。午下一時より洪沢氏四男  
と竹田竹子の結婚披露園遊會に向向はつゝの処、よほと前々よりの草臥出て、洪沢行御断  
いたしたり。已而臥。來客、森りん、得不逢、返したり。李子ハ清水の母の葬儀に十時會  
葬ス。

四月十六日 戊子 月曜 雨。予記 玉桜會第一會、本郷からたち寺。

課業例の如し。午後より麟祥院二行。集る者四十三人と云。朝十時よりみな集會ス。本堂  
の裏に広き座敷ありて、庭も広く、古くさひ(寂)たる寺らしき庭也。余興ニ、梅若米  
子の地、倉島の仕舞玉かつら、予のおちやめのとなどありて、座興種々あり。みな面白き  
遊ひて、予ハ三時過歸。

受信 館山いく子より文着。

発信 館山いく子え返事出ス。

四月十七日 己丑 火曜 晴。

火曜會稽古する。來客、正木しつ子と母と、佐藤愛子と母と。石山基威より返事あり。夕  
景、行樂して歸。

受信 神戸多田操より。

四月十八日 庚寅 水曜 晴。

生徒全体式場を集めて、主事より教育ニ付改善訓育の規則を申聞せたり。午下、河田え行、  
歸りかけ石山基陽氏を問ふ。不在。

受信 久岡麻子、京都よりは(二端)書着。

四月十九日 辛卯 木曜 晴。

課業例の如し。午下、予、李子と三越え五月人形買物ニ行て歸。來客、大炊御門師前様御  
出にて、芝増上寺授戒御すゝめにて、先々出られる日たけ参る事にする。

受信 斎藤仁子、宮崎照子。

四月二十日 壬辰 金曜 晴。

金曜會稽古する。正午より芝増上寺に参詣して、説教を聞く。植木や庭造り、一先落製(成)。  
増上寺帰途、晚翠軒え寄て筆と白紙を求て歸。

受信 大坂伏田より文着。

四月二十一日 癸巳 土曜 晴。 予記 竹田氏来る。  
課業例の如し。正子来る、夕景迄。

四月二十二日 甲午 日曜 晴。

朝九時より芝増上寺へ参詣して、授戒を得る。堀尾大僧上(正)より御髪そりを戴て、御袈裟を戴く。後、大僧上(正)に御目見をする。後四時、済て帰。大炊御門師前君に玄関迄御送り下される。

四月二十三日 乙未 月曜 晴、風。

朝、例の教授する。正午より、予、李子と市村座に行。慈善会にてはしめて此劇をみる。車輪に芸をする。かんし入たり。星の(野)花子、星野錫細君等と同座にて都合よく、夜八時済て帰。正子一泊。  
受信 大坂久岡麻子より文着。

四月二十四日 丙申 火曜 雨。

朝より火曜会にて稽古する。午下、揮毫ものす。朝、正子帰。李子、授業後、三時より市村座へ行。中村芳子、廿六日露国出発二付、御暇乞に来る。夕景迄何くれと語り合て帰。発信 久岡え返事出ス。山中秀子え手本出ス。石井初子え手本出ス。宍浦えも。

(四月二十五日〜二十七日、記載ナシ)

四月二十八日 庚子 土曜 雨。

課業例の如し。午下一時より実業之日本社の催にて、婦人世界の講演会にて、社長増田氏、仁戸部(新渡戸)博士の演舌、結構。畢而長唄ヒヤノ、同ヒヤノにて子供おどり、又ヒヤノ、バイヲリン奏樂ありて済、盛会也。此時、雨晴る。

四月二十九日 辛丑 日曜 晴、風。

有約、朝十一時より、予、李子、下婢きみを連て、大森田中氏へ行。停車場に菊子車を引て迎に来る。車に乗て田中氏に行。先、隠居兼女も大ゐに悦ひて、大座敷にて茶菓子など、実に擲(鄭)重なるもて扱て、庭なるつゝじをみせよとて、二、三年も前からの約束、漸今日はたしたり。成程長き檀(壇)を造り、四たんに五百余の鉢をならへて、花の珍らしき、つゝじになき見事なる、福岡産のよし、このなかめ尽せぬ位。此花、暮の雪の二鉢をもらふ。それより庭に出て、実によくも造りたるものかな、山あり池あり、眺望極めて佳。夫より食事になる。みな珍物、心入なる料理にて、家具も尽く高蔭絵の見事なるも

の也。種々の咄しにて時を移し、四時過帰。

四月三十日 壬寅 月曜 晴。

(五月)

五月一日 癸卯 火曜

朝、散歩して帰。火曜会稽古する。夕景、角田氏え行。天津なるいよ子死去ニ付、悔ニ行て帰。

五月二日 甲辰 水曜 晴。

課業例の如し。正午より川田氏え行て帰。中田氏よりつゝじニ鉢着。来客、下婢たか子供連て、平野元、伊東よし子。

発信 会津日下氏え縞もの小包出ス。

五月三日 乙巳 木曜 晴。

課業例の如し。主事大東氏、学校寄附之帳簿と文面を持ち来る。先理事之人え一応見せてと返したり。石山基威に中野泰えの事、再度申聞たり。天津なるまよ子の一七日ニ付、李子をして白き切花を備(供)える。

発信 尾鷲土井え小包、千葉六浦え小包、大坂久岡え文、石井初子え小包、森りんえは(端)書、会津日下えは(端)書。

五月四日 丙午 金曜 予記 閑院宮え参殿之事、午下二時四十分迄に。

金曜会稽古する。午下一時半より閑院宮御殿ニ参。愛国婦人会会長を始、地方支部会長等、本部署事、評議院参集。総裁殿下をはしめ、東伏見宮妃、伏見宮妃、久爾(邇)宮妃、なし(梨)本宮妃、拝謁ありて、御庭の新緑、殊ニ擲擲(躑躅)之満開にて、御食事はしまる時、細雨ふり出して、予等早々まかりぬ。外、皆々つゝひて退散す。

五月五日 丁未 土曜 晴。

課業例の如し。黒田侯長久殿御初節句ニ付、御祝義とあらせられ、粽五巴(把)、御料理二重贈らせられる。夕食に、石川房子、小兒伸連て来り、丹下花子も薩州より久々にて来られたるに付、右御料理にて、職員、八重子、朝倉、青木等、予、李子と座敷にて、日下氏より到来の朱塗膳、同碗と初て用ひ、大賑々敷、長久殿の万歳を祝ふたり。房子、子供ハ一泊ス。

五月六日 戊申 日曜 陰。

本日は愛国婦人会、偕行社にて茶話会。社員に記念品を贈る事二付、出席之筈、微恙にて臥辱ス。

受信 函館中瀬より黒豆一袋着。

五月七日 己酉 月曜 雨、晴。晴雨不定、雷鳴もあり。予記 天気予報、曇小雨。

遠足日。昨夜よりの大雨にて朝もまだ雨ふりたれば、遠足中止と究(極)る。生徒ハ大不平。課業例の如し。天候たん／＼とよくなりて、天晴朗となる。また十一時頃より雨ふり出したり。雷鳴もありて夕立の如し。芝増上寺堀尾大僧正殿え書面、及金廿円、書の御礼にさし上る。

受信 会津日下礼子より。

五月八日 庚戌 火曜 晴、雨。

火曜会の稽古する。

五月九日 辛亥 水曜 晴。

課業例の如し。校友会相談会。午前十時より会員集る。会の打合せをする。

一 五月廿二日と

二 上野精養軒

三 午後一時より

四 新戸部(渡戸)博士演舌アリテ

五 余興、畢食事

六 五時閉会

右之通ニ治定致し候。昼御弁当を出す。畢而外之会員ハ帰りて、元老連中ハ六時比迄。発信 房州より、そら豆二俵着。

五月十日 壬子 木曜 晴。予記 遠足会執行。

朝四時起。準備する。六時出門、両国停車場に行、七時四十分発車ス。車室十九台買切ル。生徒の悦限りなし。天気にはあんしケ(案じ気)なし。風あり。九時頃、稲毛海気館に着。生徒等、直ニ海へは入ル。この海気館の隣に亀沢氏別荘ありて、今年一年に入學したる嬢の案内にて、一年生たけハ此別荘にて大ゐに歓迎せられたり。此父なる人も挨拶に来られ、大ゐに歓迎を受く。日の永き事、遊びくらしたり。三時集りて、停車場三時五十分発にて、みな喜びを尽して両国ニ着。

五月十一日 癸丑 金曜 晴。驟雨あり。予記 竹田氏来る。

金曜会の稽古する。朝、竹田氏、長谷川千賀子来る。米倉米子も。四時過より、予、李子

と森律子の招待にて帝劇見物する。十時過帰。

五月十二日 甲寅 土曜 晴、雨。

課業例の如し。靖子来る。朝鮮弘より小包物、端書等持参する。弘の便りなきを大に懸念いたし居る処、先々無事なるを安神ス。弘より夏の網提袋。遠藤種子、日下田田鶴子の兩人より、青銅一輪生、唐墨贈られ候。来客、加茂とみ子、長谷川千賀子。米倉米子、竹田氏に治療をもとむ。午下六時前より橋岡研究会二行て帰。

受信 朝鮮より物品着、弘は〔端〕書も。

五月十三日 乙卯 日曜 雨。

朝より揮毫ものス。来客、垣見たか子、御礼にきたる。

発信 朝鮮と房州え返書ス。

五月十四日 丙辰 月曜 雨。 予記 竹田氏。

課業例の如し。

五月十五日 丁巳 火曜 晴。

火曜会稽古する、昼迄。来客、箕作縫子、今ハ矢野夫人。下婢きぬ、親戚え遣す。李子、四ッ谷松本美代結婚披露会出席ス、築地精養軒え。

発信 三重県服部氏え絹地、其外小包共返却ス。

五月十六日 戊午 水曜 晴。 予記 河田氏。

課業例の如し。河田氏え行て帰。来客、橋本町子、秋田千田勇子。

五月十七日 己未 木曜 晴。 予記 竹田氏。

課業例の如し。来客、吉田園主面会ス。同園の写真と新茶持参して、翁の悦限りなし。先達而の泉会を同園にて遊ひしを大そう名誉におもひて也。志賀鉄千代来り、李子と同しく新戸部〔渡戸〕え行て、校友会の講演を頼みて、快諾致されたり。

五月十八日 庚申 金曜 晴。

金曜会稽古する。午下より高輪毛利公え参る。此〔今〕般公爵御長女あき子さま、醍醐侯との婚約御齊にて、愈廿八日御輿入の慶事二付、御祝もの持参致して、安子様、公爵元昭様、みさ子様、あき子様にも御目通り致して、久々の御咄しにて、是非御三度上ヶ度と仰せられて、御夕餐を戴て帰。

五月十九日 辛酉 土曜 晴。

朝の課業畢る。午下、浅草本願寺の婦人会に参る。名古や（屋）の宮部氏の説教よほと面白く聴聞して帰。

五月二十日 壬戌 日曜 晴。 予記 観世追悼会、九段能楽堂にて。朝八時半より九段能楽堂に行。

鶉飼 山階氏

清経 喜之

礎 元義、是もよく出来かんしんす

安宅 橋岡氏、是か本日の呼物なり、落付よく大出来なり

小鍛冶 元滋、其外連吟、仕舞等もあり

弓矢立合 元滋、右京、六平太、是ハ珍らしき

本日の見物ハ、実にこの能楽堂出来てよりはしめと云大入、立錐の地もなくあふれて、御断申上たると云、大々盛会也。下婢に召仕ふ人、斎藤久米女、其娘きみの二人をやとひ入る。

五月二十一日 癸亥 月曜 晴、雨。

課業例の如し。李子、恙ありて明日の大切なる日ニ付あんまをさせたるに、其動氣（悸）はけしく、夜ニ入て益いたみ出して、苦痛に堪かねて、竹田氏呼に人を遣したれと、家内留主にて参りかぬると云返事、明朝来ると云。夜通しいたみ通したり。此時十一時頃、下部帰りたり。夕景より雨ふり出して、夜一夜雨しきり也。明日を気つかひたれと、致しかたなし。

五月二十二日 甲子 火曜 晴。 予記 本校々友会、上野精養軒、午下一時始。天気ハ晴朗、風なく、実によりぬきの日也。

火曜会休業。朝起てみれハ、今迄ふり通したる雨漸やみ、晴に相成たり。竹田氏をまても来らず。如何の事とあんし居たり。予ハ十一時過より車にて上野精養軒に行。道すから校友会員の行装織か如し。式場、舞台等、よく準備もとのひて嬉し。午下一時半開場、さしもの庭前立錐の地もなしと云盛形（況）。先、予挨拶ありて、新戸部（渡戸）博士の演舌、是ハ前より李子の依頼にて、女の心の大なる様と云事ニ付演せられ満場大喝（喝）さい。次梅若よりの仕舞五番、手品、だい（太）神楽、花柳子供の躍、次ニ赤星夫妻のヒヤノ、三味線、長唄饞はた（賤機）、勸進帳、花柳勝治郎浦島躍、西洋奇術、日比野の剣舞等にて、五時余興畢。生徒七百人は御弁当にて退散。外、校友会員ハ大広間にて食事はしまり、実に見事盛会也。安堂（藤）恭子殿下、黒田茂子殿下をはしめ、九条公夫人、其外華族の方々も三百人余にて、千人余の会員、実に本年のやうなる盛会ハ未曾有也。六時過、一同退散す。万歳々々。李子の見舞とて、元老連中十八、九人集りて、本日の盛会のはなしのみ也。

受信 藤井瑞枝書着。

五月二十三日 乙丑 水曜 晴。 予記 竹田氏。  
朝より課業例の如し。来客、中野より正子 見舞に来る、千葉宍浦和子 子供二人連て。是迄召仕ひたる房州のきぬ女、いと間(暇)出す。

五月二十四日 丙寅 木曜 晴。  
課業例の如し。午下四時より橋岡氏舞台にて袴能をみる。夕景、さむくなりてとても凌きかねて、暫時にして帰。来客、小川米子、津久居国子、中野寿子、靖子。

五月二十五日 丁卯 金曜 予記 竹田氏。  
金曜会の稽古する。

五月二十六日 戊辰 土曜  
課業例の如し。

五月二十七日 己巳 日曜 晴。  
午下四時より上野精養軒に行。本日は星野錫嗣子辰雄と穂積重威妹万亀子と結婚披露会也。実に総表門よりすへての裝飾、大々の立派なるもの也。来客千人余と云。

余興 義士神崎与五郎 貞山  
妹脊山 千代糸萩 小さん、円右の一座、ふか七、政岡の対面

食後 吾妻八景 七福神

藤間勘右衛門  
松本幸四郎

九時頃畢而帰。

五月二十八日 庚午 月曜 晴。 予記 東洋婦人会、欠席断。  
課業例の如し。酒匂藤井より伝の元稿来る。校正済、出ス。

五月二十九日 辛未 火曜 晴。  
火曜の稽古する。午下より田島吉兵衛方にて唯信会二付、説教もありて参詣する。夕景帰。

五月三十日 壬申 水曜 晴。  
課業例の如し。正午より観世を問ふ。河田氏へ行。花や(屋)にて撫子五鉢もとめる。秋元子を御蒙中御見舞申上候。八重子様ニ御目にかゝりて種々御咄し申上る。御合のもの戴て、田村氏を問て帰。来客、大沢亀子。  
受信 さら豆、藤井瑞枝より。房州より鱧の佃煮。

五月三十一日 癸酉 木曜 雨。 予記 竹田氏。  
早起。庭の掃除する。俄然リウマチ起りて休業ス。正午、竹田氏来られる。下瀬房子来りて治療を乞ふ。

受信 朝鮮久岡麻子より。又返事出す。  
発信 房州え鯉の礼状出す。藤井瑞枝えも。

(六月)

六月一日 甲戌 金曜

金曜会の稽古する。閑院宮様え参り稽古申上て、小早川式子さま御頼みの事にて、此日、高輪茂木え行、不在にて、乃(仍)て小早川男え行、種々御咄しも申上て帰。

六月二日 乙亥 土曜 晴。 予記 有楽座え、大沢氏より紹(招)待。

朝の稽古畢る。来客、茂木の坂本氏ニ逢ふ。有楽座にて大坂文楽の義太夫会をきく。

英太夫

静太夫 義土之本蔵下屋敷之場

鍛太夫 合邦

古鞞太夫 沼津之場

久々にてこの義太夫を聞く。さすがに大坂のもの、意気賢(堅)実、真に入りたり。三味線も実にかたり手と気合の投合、かんし入たり。十一時帰。

六月三日 丙子 日曜 晴。 予記 毛利公招待、午下二時より。

朝九時より觀世会二行。橋岡の加茂と兼平後シテ前迄にて帰。午下一時より、予、李子と同しく毛利公邸園遊会ニ参る。天気もよく、大勢の御客にて千人と云。此度御長女顕子様、醍醐侯との御結婚御披露をかねての事ニ付、大々御園遊会のよし也。御庭を一週(一周)して後、余興場に行。西洋奇術十数番済て食堂ニ入。五時帰。

受信 京都御寺の御所より、そら豆着。

六月四日 丁丑 月曜 晴。

課業例の如し。来客、茂木の坂本氏。竹田氏、京都え行。  
受信 三条様より御文着。大坂跡見より。

六月五日 戊寅 火曜 雨。 予記 \竹田氏。

静かなるよき雨ふる。火曜会の稽古する。毛利公より、八日に閑院宮智恵子殿下と三条資

君様を御招待に付、私にもと御頼みに相成、承諾す。  
発信 三条様御返書出ス。

六月六日 己卯 水曜 晴。  
課業例の如し。午時より河田氏二行。  
受信 上海津田氏より文着。

六月七日 庚辰 木曜 晴。 予記 午后一時より高松子爵邸二協議会。  
課業例の如し。午下早々、高松子爵邸に行。浅草婦人会協義(議)にて輪番桑門加藤、  
其外僧侶、会長及婦人十人計、相談する。五時帰。

六月八日 辛巳 金曜 晴。 予記 午下二時より高輪毛利公邸に行。  
金曜会にて稽古する。毛利公より、閑院宮妃殿下時に成らせられ候二付、午前に御出を  
と仰せられ、昼食後早々毛利邸に参る。ほとなく妃殿下成らせられる。本殿にて公、御夫  
人と種々の御物語あらせられて、御合物召上られ、其内三条資君様成らせられる。三時に  
常盤御殿安子様の方え成らせられる。御余興、薩摩琵琶一曲、長唄下かた入にて大賑やか、  
躍等もあり、御食事も実に山海珍味御心尽されし御馳走にて、夜八時還御相成、余もつゝ  
ひて帰。

六月九日 壬午 土曜 晴。  
課業例の如し。

六月十日 癸未 日曜 雨。  
午前九時より、霞ヶ関大谷様え参る。此時九条恵子様、野田操、浅草輪番ト桑門も先在て、  
光瑩様、御裏方御目二かゝりて、此度婦人会之義二付、御相談申上る。それより御二度い  
たゝきて、午下二時より自動車にて、恵子様、操、予等、浅草本願寺え参りて、婦人幹事、  
秤儀(評議)員等も十名計集りて、其外本願寺末寺僧侶(侶)たち廿人計寄合、種々協  
義(議)あり、四時比帰。

六月十一日 甲申 月曜 晴。  
課業例の如し。午下三時より秋元興朝様之五十日祭二付参拝ス。食事もありて、御一同様  
に御目にかゝりたり。それより田村氏を問て帰。

六月十二日 乙酉 火曜 雨。  
火曜会稽古する。午下四時より約ありて、美土代町板垣医師え行。素謡会にて細君の姉  
(二字空白)氏、玉枝、浜町の中野清之助、其母と也。第一、融二木、角田川予、小

原御幸清之助、三番にて跡ハ独吟にて、夜九時帰。

\*跡ハ(後ハ)

六月十三日 丙戌 水曜 雨、晴。 予記 毛利美佐子夫人御来臨。

課業例の如し。午下二時、毛利奥方御入二付、御待申上ル。朝より大雨風を添て、天候悪く、いかにやと電話にて伺たるに、雨中にても参るとの御事にて、正午頃より空も晴れたり。自動車にて奥方様と小早川式子様、大村梅子様、御三方にて御入なり。先洋館にて、夫より二階にて昔し咄しに、塾生の時分の御咄し面白く、今一度塾生になりたいなど仰せられ、他人交えず、此時御合のものさし上て、それより寄宿舎と学校え成らせられ、教室すへてを御一覽ありて、塾の十四号詰所にて茶菓など召上りて、四時過御帰館相成たり。

六月十四日 丁亥 木曜 晴。

課業例の如し。来客、田中三保子、御礼に。予、三時頃より霞ヶ関大谷伯え参る。御法主御留守にて、暫時にして帰。夕景、白山下まで散歩して帰。

朝三時過、中根氏死去。

受信 多田操より文、及桑硯箱着。

六月十五日 戊子 金曜 晴。 予記 竹田氏。

金曜会の稽古する。中根民子、本日葬儀二付、種々協義(議)之上、此人ハ十年間之職務中ニたをれたる二付、学校より香料として金百円也、生徒一同より金百円也、教員一同より金三十拾円也、校長より花輪、大々の御菓子え(衍)、供える。十一日講堂にて檀(壇)をしつらへ、中根氏写真を祭り、校長はしめ職員、生徒一同、告別式を行ふ。午下休業ス。葬儀ハ二時出棺、九段協会にて葬式行ふ。校長代理大束氏、弔詞をのへる。生徒一同之代理弔詞代読ス。畢而帰。

発信 上海津田氏返書ス。多田操子え、山中秀子えも。

六月十六日 己丑 土曜 晴。

課業例の如し。午下一時前より浅草婦人会に参る。説教二席聴聞畢る。婦人会二付、跡に残りて、板(坂)東法(報)恩寺、保倉一道桑門等、協義(議)もありて、愈此会拡張之きざしも出来、大ゐに一同かたを入れる様に相成、先々好時機に至る。六時帰。来客、横浜古屋益世。

庭の泰山木始めて花さく。

六月十七日 庚寅 日曜 雨。 予記 朝、橋岡行。

朝八時より橋岡氏研究会二行。会する者遅刻、十時始まる。加茂研究する。十一時半、済て帰。此時、雨ふり出したり。

六月十八日 辛卯 月曜 晴。 予記 竹田氏。  
課業例の如し。

六月十九日 壬辰 火曜 雨。

火曜会の稽古する。来客、日比野雷風、中根民の姉と親戚の人と、民子の病中より死後に至る迄の御恩のほどを御礼にきたる。終日のあめ(雨)静に、さみたれなり。

六月二十日 癸巳 水曜 晴。

課業例の如し。午下早々、河田氏え行て、帰途観世え寄。此夕仕舞会。婦人連二付、是非にと申されて、六時に観世え行。仕舞番数五十番位も有て面白し。予も一番舞たり。九時過済て帰。

六月二十一日 甲午 木曜 雨。

課業例の如し。

六月二十二日 乙未 金曜 雨。 予記 竹田氏。

金曜会の稽古する。

六月二十三日 丙申 土曜 雨。 予記 安藤子御初節句、御招二預ル。

朝の課業如例如し(衍)。午下三時より浅草安藤様え参る。やかて閑院宮御息所様、黒田茂子様御客にて、予、御相伴、御若子様誠に御肥立よく、何の御申分さまもあれせられず、実に／＼可愛々々御子さまにて、おだ(抱)き申て御悦ひに相成、御たくましき御子さま也。其内御合のもの、御すもし、御菓子等にて、御新築の御子さまの御方にて、予の仕舞も致し、梅若門弟なる某の謡等もありて、蓄音機(器)なども御なくさみにて、御食事になる。御ゆる／＼種々御咄しなから御夕餐も済され而還御なる。予もつゝひて御いと間(暇)申上る。此時より雨ふり出したり。また日は暮ぬ日永の最中也。

六月二十四日 丁酉 日曜 予記 午下四時帝国ホテル、大原伯と藤堂子の結婚披露会。

朝より揮毫ものス。午下三時半より、予、李子と同じく帝国ホテルに出席ス。大原伯嗣子ト藤堂芳子の結構(婚)成りたる披露会開かれる。もはや余興、長唄鶴亀済て、白(伯)鶴講談、長唄の獅(子)石橋にて、後食堂開かれる。中々の大勢にて、食事済てもまた日暮ぬ。六時帰。

六月二十五日 戊戌 月曜 雨。 予記 地久節二付、休業。

朝より揮毫ものス。来客、野田操。午下四時より小松侯に参りて、明日の御三年祭に付、

御霊前え御備（供）もの捧る。御霊前参拝して帰。

六月二十六日 己亥 火曜 晴。 85（度）。 予記 小松宮妃頼子殿下、御三年祭御墓前祭、午後二時。

朝より雨晴れて、はしめての雨はれにてむしあつく。火曜会の稽古する。午下一時より豊島か岡に参る。二時、御祭典御執行。玉串を捧而四時帰。来客、浅草本願寺婦人会の義二付、加藤氏相談に来る。日比野来る。桜花彩色画渡す。庭の泰山木花五ツ開く、珍らし。

六月二十七日 庚子 水曜 晴。 87（度）。

課業例の如し。

発信 酒匂藤井え端書出ス。

六月二十八日 辛丑 木曜 晴。 89（度）。 予記 \ 竹田氏、本日より身体よろしきにより一先断る。

課業例の如し。午下二時より浅草本願寺に参る。本日ハ婦人会相談にて、会長も九条恵子様も御出席にて、末寺面（重）役なる集合して、婦人会発展二付、会長始より協力之事頼入る。この僧侶たちも誠意誠心にて尽力可致様申出られたり。先々安神ス。五時過帰。驟雨雷鳴あり。

六月二十九日 壬寅 金曜 晴、雨。

朝より金曜会稽古する。午下一時頃より秋元八重子様、忌明の御礼に御出にて御合のもの出ス。書画の御依頼もの御揮毫にて、四時頃帰られる。来客、清水連郎。此時俄然驟雨、大あられもふる。

酒匂藤井より返上来る。

六月三十日 癸卯 土曜 予記 霞ヶ関大谷伯行。

朝六時、李子、軽井沢え行。課業例の如し。午下二時より大谷伯様え集会ス。素謡もはや三番済、小鍛冶、藤、番囃子遊行柳伯、河原、熊野伯、河原、舞囃子雲雀山後藤、放下僧吉田、素謡小袖曾我にて畢、食事。仕舞数番、一調等にて九時退散。帰途、月清く涼夜心地よし。帰宅。李子も軽井沢より帰る。房州より電話にて、重威、腎臓炎二付、清水と中野、玉枝えしらせくれと云。早速中野えハ電報ニテしらす。外、清水、玉枝、電話にて伝言ス。みな不在中。

（七月）

七月一日 甲辰 日曜 晴。  
発信 山中秀子、早川八寿え返書ス。

七月二日 乙巳 月曜  
課業例の如し。本日より暑気ニ付、半日授業とす。

七月三日 丙午 火曜 雨、又晴。 予記 浅草本願寺ニ行。  
火曜会稽古する。午下二時より浅草別院ニ行、婦人会。此日ハ末寺、坊守の人々集る。婦人の説教済で、大門主御参りニ付、坊守人々に御対面有て、此度婦人会発展ニ付懇々と御依頼の御言葉も有て、又この世話人衆も集りて、それえも御依頼の御言葉有て、一同婦人会に誠意を以て尽力いたすべく、大ゐにイキこみたり。大々安心す。余興、琵琶もあり。是ハ説教に節附したるものにて、仏門に入れるてた（手立）てなり。

七月四日 丁未 水曜 雨、晴。  
課業例の如し。

七月五日 戊申 木曜 雨。  
課業例の如し。

七月六日 己酉 金曜 雨、晴。 90（度）。  
晴雨定まらず、風強し。金曜会稽古する。

七月七日 庚戌 土曜 雨、又晴。  
課業例の如し。朝雨、后晴、風強し。泉会執行、会員集る。殊の外大勢にて、川口愛子氏の洗濯染色廢物利用、講演と実地にて面白く、よく研究したるものかな。みなかんし入り。

七月八日 辛亥 日曜 晴、風。 87（度）。  
朝より中元の往来にいそかし。来客、倉島喜見子。

七月九日 壬子 月曜 晴。  
課業例の如し。

七月十日 癸丑 火曜 晴。  
課業例の如し。

(七月十一日〜十二日、記載ナシ)

七月十三日 丙辰 金曜 晴。 95 (度)。

金曜納会、多忙ニ付御断する。朝七時半より大崎なる花房義賢(質)君の告別式に参る。御焼香して帰。此場所、馬車、自動車にて大困(混)雑を究(極)めたり。帰途、万里家え中元ニ参る。

七月十四日 丁巳 土曜 晴。 95 (度)。

中元之往復にて大多忙。午下四時より閑院宮様え中元の御祝義(儀)申上、御息所君様に拝謁申上。十七日、季子様御三年之事、しきりに御仰せられたり。それより東伏見宮様え参り、御留守さまニ付、糸島さまに逢て御祝義(儀)申上而日暮帰。来客、堀田伴子様、和子様、角田栄子。

七月十五日 戊午 日曜 晴。 90 (度)。

朝より弘来る。近而(ママ)渡鮮之筈。津田弘視より書至、栄子、子供等と十四日出帆之筈之処、栄子一両月前より腸胃不勝之処、右引越荷物片付ものやらにて勞努(ママ)したるものか、十一日午前一時、不幸にも流産いたし候、三ヶ月目にて男子のよし、残念限りなく、夫故乗船見合せて、七月三十一日八幡丸にて出帆、八月六日横浜着の筈のよし申来りて、驚々入たり。直ニ返書出ス。流産、本産より跡大切故、養生専一にして十分全快之上帰京の事、申遣し候。此朝、御所皇后陛下御前え汲泉五十、五十一号、千種典侍様え御献上願出、直に御目錄五千疋御下賜相成、有かたき事也。正午より芝青松寺薰風会に参る。北野禅師之信教講話二席聴聞して、午下四時頃帰。受信 上海津田より書至。

七月十六日 己未 月曜 晴。 85 (度)。

此朝、房州いく子より手紙にて、父事十一日午後より悪寒強く、三十九度迄登り、十三日の午後ハ四十度六部(分)迄登り、大ゐに驚入たり。腎臓及膀胱よりの熱にて、何分衰弱強く、実に危険、私の眼にハ今度ハ如何かと存せられ、容体悪き様なれハ、電報にて可申と申参り、一同大ゐに心痛いたし候。泰ハ千葉地方え揮毫ものに行。来客、岸上夏子、母とは迄習字稽古の御礼に来る。受信 房州いく子より。

七月十七日 庚申 火曜 晴。 70 (度)。 予記 竹田氏。

はしめて七十度と云冷氣にて一息つきたり。朝六時半より閑院宮に参る。故季子女王様の御三年祭、七時半御霊祭、参拝する。畢而十時、豊島岡御墓前祭ニは不参致したり。房州重たけ(威)の病氣ニ付種々心配之上、愈基威氏と正子と渡房之事ニ決し、今夜正子此

方ニ一泊ス。来客、斎藤仁子。弘ハ今夜汽車にて渡鮮いたしたり。

七月十八日 辛酉 水曜 小雨。70(度)。

朝五時、正子、基威、房州え出発ス。小雨ふり出して風もなく至極静にて、一番汽船にて出帆したり。直ニ房跡見え電報かける。午下、房基たけ(威)氏より電話にて、二時無事着、早々重たけ(威)の病を問ふ。段々と衰弱甚しく、先々重体、こゝ二、三日の処と云医師診★(言十察)(察)にて也。長尾収一來る。下部辰いと間(暇)を出す。今夜、房基たけ(威)より電報にて、重たけ(威)病、刻々に険悪ニ付、医師よりセン(宣)告致したる処、私に逢ひ度と申され、右ニ付、おのれも跡にて残念と申よりも今一度逢度と申て遣したり。

七月十九日 壬戌 木曜 晴。83(度)。

学校試験脩、予、琴ノ試験を聞。午下三時過、房州より電話にて、本日午後二時前死去のよし申来。実に残念限りなく、明朝は必逢見ること仕度もスツカリ出来たれと、もはや死後の事なれハ、御渡房の事ハ断念なさる方よろしからむと云。夫にて私ハ思ひとまりたり。来客、葉室伯、姉小路延子、取敢す来弔せらる。李子、泰、清水 竹女を連、十時夜行にて渡房ス。此夜、井深氏、石山みさを。

受信 房州基威より五時電執(報)、ヲヂシンダ。

七月二十日 癸亥 金曜 土用入。晴。83(度)。予記 竹田氏。

朝より、城、斎藤菊寿、大束、石子、森竹、門馬、鎌田、鼻高き方さゝ(佐々)木。職員一同より御見舞物、蜜三瓶、外ニ鐘詰六箇。石井初子、鳥尾、暑中に。河辺男、中野より靖子、石山すま子。

七月二十一日 甲子 土曜 土用二郎。陰。83(度)。

来客、橋本太吉、姉小路延子、新田細君、跡見極。茂木氏の阪本氏来りて、松子の縁談に付て、先阪本氏だけの承諾をして、是から老松町えも相談に及ふ事に相成候間、此段御承諾を願ふと云。

発信 房州跡見えもゝ子え、石井、宍浦、大江氏え。岩手県斎藤権平え。

七月二十二日 乙丑 日曜 土用三郎。晴。89(度)。

来客、阿部基慶。宮原六之助電話にて、神戸鶴子より朝六時電報にて、ヲヂウエシキヨソウギドコニテアルカワタクシカイソウイタスベキヤヲサシツネガウ。未だ房州より何のさたも、すべて不明。其内、朝八時頃、訃音来る。七月廿四日午前八時、自宅ニ於テ神式ヲ以テ葬式執行、目下酷暑之候、遠路御会葬ハ堅ク御辞退申上候。長尾収一、酒井喜美子夫人、清水連郎より電話にて、茶毘にして神葬之事申来る。午下三時、もゝ子より書至、

是迄の事委細申来る。始而安心。

岩浪稲子、舎弟の死をいたみて、

今一目あひみんとのみ思ひしを安房（(会は)てかなしきへ館（隔て））のやまに

受信 姉良様より。もゝ子より書至。

発信 神戸鶴子え返書。姉小路良子さまともゝ子えも返出ス。

七月二十三日 丙寅 月曜 土用四郎。晴。93（度）。予記 竹田氏。

朝よりむし暑くてたまらむ。婦人界発刊を祝しての歌かきて遣ス。来客、宮原六之介、悔に。方々より弔詞。閑院宮妃殿下御使にて、喪中御見舞とあらせられて、大く御見事なる御菓子ト重威未亡人え金五円賜り候。早々房州え此よし申遣り候。御菓子ハ職員一同えいたゝかせ候。松尾義夫。此夕、井深氏来りて是非々々会葬致し度とて、今夜行にて出帆いたされ候。宮様よりの御備（(供)）もの事伝候。

受信 上海津田弘視より電報、フジヲイタム。

発信 房州李子え。

七月二十四日 丁卯 火曜 土用五郎。晴。90（度）。

朝八時、職員生徒一同集る。校長、生徒ニ夏期休暇中之心得とも咄して、主事より試験成績（(績)）、其外種々咄し有て、終業式めて度畢。琴科、点茶、免状を渡ス。来客、裏松千代子、九条家より御使。寄宿生帰省、何分百廿名と云、順序よくみな帰したり。斎藤仁子、迎ひに来る。万里家より電話にて、房州行之者本日六時着のよし、皆帰るか慥かならず。午下六時、正子、泰、房州より帰。泰、此方え来りて神葬儀其外すへて報告ス。先々盛なる葬儀にて、案外よき結果といふ。

七月二十五日 戊辰 水曜 土用六郎。晴。90（度）。

朝より風なく蒸あつく、こゝ（ママ）暑さに一致して暑をしのか。正子来りて、十八日房州え行てよりの翌日十九日よりの出来事、種々申聞て、大に安心々々いたし候。夕景、帰。此時、石山基威氏帰りて、是又万事葬儀迄の申出候也。夕景、玉枝、井深氏も来る、石井まよ子、角田栄子。きさいの宮の鈴虫を籠に入れていたゝきたり。

ふり出てゝなくすゝむしの声きけはみやもふせやもかはらさりけり

受信 跡見三次郎より弔詞。綿田氏、もゝ子より。

七月二十六日 己巳 木曜 土用七郎。晴。90（度）。予記 竹田氏。

毎朝の如く風なく、炎熱やくか如し。朝十時頃、李子より電話にて、廿八日十日祭二付、かり埋葬執行二付、それ迄滞在して、翌朝廿九日朝帰京のよし、申参る。夫二付、玉枝をたのみ埋葬に来てもらい度よし二付、玉枝さんを頼み候也、承知にて、明朝一番船にて渡房究（(極)）り候。万里様えも電話にて申上候也、明廿七日出帆約束相成り候。房跡見に

て其日の菓子誂られて、それ／＼申付候。今夕六時頃、竹女帰り候。  
発信 房李子え。

七月二十七日 庚午 金曜 土用八郎。晴。90(度)。

本日ハまた暑氣一層劇烈。朝五時より下部菓子もたせ、万里様え遣し候。地方干魃にて所々  
雨乞、新聞にてハこゝ二周(週)間位ハ雨なくと申居。来客、長谷川千賀子、松本麻子。

牽牛の一むちうちて天の川

織姫の糸よりかけてまつ今宵

いく千代とかけし契や天の川

受信 京都万里幸子さま、大阪雨宮より。

七月二十八日 辛未 土曜 陰、小々雨。70(度)。

昨夜ハ涼氣を覚ゆ。朝七十度と云。三時起て庭中見廻る。空曇天ながら雨ハスリ毛の様な  
のか少時ふりたる計也。本日ハ房州重威の十日祭、午下四時より近傍なる観音寺々内に仮  
埋葬之よし也。来客、松平鞆子様、跡見寿子。

ふれよ／＼声ふりたてゝ鈴虫のなけともさらにふらぬ雨かな

一切の瓜を命のすゝむしも楽しき世にや声のすゝしさ

受信 志賀鉄千代より、なすと枝豆。石山吉子、大炊晨子より菓子御見舞。

発信 京都万里智さまえ、長谷川ちか子え、大坂雨宮え。

七月二十九日 壬申 日曜 晴。85(度)。

けふハ李子の帰京をまゝ(ち)つゝ、愈一番汽船にて出帆と云、万里家よりの電話にて。  
午下早々、静子、寿様、竹つれて迎ひに行、車の銀を迎ひにやる。四時、李子帰。先々無  
事。房跡見の死後、葬式より十日祭迄の事共、委細報告ス。自分培養して居るするか(駿  
河)蘭(ラン)花始てひらく。新田政子、此日より寄宿する。

七月三十日 癸酉 月曜 晴。87(度)。予記 先帝陛下御五年式祭。竹田氏。

国旗をかゝく。五年前の今日の御事追懐して、なげきの涙くりかへし候。来客、玉枝、城  
氏、横田縫、浦艶子、門馬、志賀鉄千代。毎夜月すゝし。

七月三十一日 甲戌 火曜 晴。85(度)。

朝より揮毫ものす。夕景、姉小路公正(以下、記述ナシ)。

(八月)

八月一日 乙亥 水曜 晴。 87 (度)。

来客、高松子爵母堂、中野正子。万里小路伯様より下されし駿ヶ(河)蘭花見事に映出し、外の鍛冶屋蘭、玉花蘭もみな花を催して、室内外二も香奇(気)紛々。予、嬉しき限りしられぬ。今夕、此蘭を御目に懸度とて、万里伯を御招き申たり。六時頃より御入来にて、先蘭を御覧ニ入る。実に蘭作もかゝる見事なる花及葉も立派とて、御賞賛ありたり。庭によく水をたゝへて、芝生にて夕餐を上る。折から月十四日にて、殊に興を添ふ。殊の外御悦ひにて、十時帰られる。

八月二日 丙子 木曜 晴。 87 (度)。 予記 竹田氏。

此朝八時半の汽車にて、井上八重、静子、寿子、竹ト車夫銀、五人連にて軽井沢別荘に行。午前十一時過、遠雷、少し雨ふる。木の葉ぬれたる計。来客、代々木より石山吉子、晨子。此日より下婢渡渡辺久爾、召かゝへる。津田より電報、長崎え着、六日横浜着。直二中野え文出ス。心地よし。十五夜の月清し。芝生にて、予、李子和朝倉、新田と月見する。

受信 津田より電報着。  
発信 中野跡見え。

八月三日 丁丑 金曜 晴。 83 (度)。

昨夜よりの雨にて、実に金の如し。しかし大木の下迄には潤はぬ雨也。又、度々に夕立めきたる雨にて、今日は水打やめたり。李子ハ方々え暑中見舞に廻る。夜帰。大沢亀子。  
受信 房州いく子より文着。

八月四日 戊寅 土曜 晴。 82 (度)。 予記 竹田氏。

地方関西降雨ありて、金よりも尊しと云。来客、手塚氏、竹田氏、煎茶を出して蘭の高評などありて面白し。神戸津田より電報にて、六日ヒル横浜え着。其電報、津田え申遣し候。今夕、李子の送別にて、庭の芝生にて夏の竹の丸テーブル、竹の椅子にて晚餐を食ス。此時、門馬氏きたる。

受信 房州いく子え返書。  
発信 津田より電報、六日ヒル横浜着。

八月五日 己卯 日曜 晴。 92 (度)。

朝四時起。五時半、李子和予、上野停車場迄送る。万里伯と同行にて、乗車客、大多数にて、一等席となくやかましき事也。やかて六時半、さよならにて進行したり。それより不忍池の蓮花をみる。今を盛と咲出たり。花葉とも七本計もとめる。帰宅早々、真の手桶に清涼なる蓮花をさしはさみて、茶を煎て独り楽しみ候。巢鴨植木や来て、蘭の花に驚入たり。来客、大炊御門お駒、中村幸子、高田美代子の父鑑三。  
受信 軽井沢もゝ子より電報、十一時無事着。

八月六日 庚辰 月曜 晴。 90 (度)。

早起。掃除して、茗茶を煮る。独のみ、独味ひ、独樂しむ。是又銷夏の一適也。来客、中村安代、居間にて煎を出す。喜んで帰りぬ。津田一行ハ本日横浜着、迎ひの人なく、石山基威と下部と亀屋と逢ひに出たり。東京駅え着か、それか分らぬて困り入たり。

受信 酒匂藤氏より文着。

発信 軽井沢も、子え文出ス。酒匂藤井氏返出ス。

八月七日 辛巳 火曜 晴。 88 (度)。 予記 植木や(屋)。

朝早く中村元嘉氏御出にて、蘭花の盛なるを見て大に驚、賛賞不止。わか蘭花ハ一鉢に二本位より花ハもたまぬ(と)、申されたり。茗茶を煮てさし上、種々閑談して帰られたり。来客、夕景、玉枝。軽井沢も、子より文着。この一行之電報不着にて、迎ひの者、車などの用意もなく、其内停車所にハ一台の車もなく、電車も出て仕舞、みな、荷物をさげ(提げ)て、日中テク〜て(と)山荘に着られたりと云。石山氏、電報出(失)念の罪也。

受信 も、子より文着。

八月八日 壬午 水曜 立秋。晴。 88 (度)。 予記 植木や(屋)。

朝八時頃、酒匂より藤井瑞枝子来る。昨日御返事戴候二付、直ニ今朝四時より参りたるにて、久々に嬉しく、此節漸気分もよくて、出京致したり。わか伝記二付種々かたり合、朝飯もまた(未だ)たへず(食はず)とて漬ものてと云、昼ハなんてもよろし、夕餐ハ鰻飯と約束して、午後あんま(按摩)も呼て昼寐して、四時入浴、五時食事済て、六時帰りぬ。

八月九日 癸未 木曜 晴。 90 (度)。 予記 竹田氏、植木や(屋)。

朝より箱書附などする。二階も火気つよくて、とても揮毫もの出来ス。来客、此度裁縫の教員某。日おほひ(覆)出来たり。万里小路伯様、軽井沢より御帰京のよし、申来る。中野上町飯田又右衛門、番町千五百五十二竹田寛子。

八月十日 甲申 金曜 晴。 89 (度)。

朝、大東氏来る。洋館の日ライ(覆)取附させる、勇屋に。此記事ハ十一日也。

受信 軽井沢も、子より。

発信 寺田氏、小野、遠藤、木津跡見、大聖寺、神代、みな小包共。酒田港池野文質。

八月十一日 乙酉 土曜 晴。 89 (度)。

来客、実業之日本社、橋本文吉。山根文子。姉小路良子様、万里小路幸子様、高倉寿子様  
え文及小包物出ス。今夕、万里さまえ行。此日四時頃、竹、軽井沢より帰る。

今夕食後、万里様え行。軽井沢よりあまり早く御帰りに成候二付、いかゝとあんして参り、  
御面晤いたし候。実に清涼なる処にて結構なり、然し山登りには降参の外なしと申され、  
これにさそく御困りの事と存候。十時頃迄御咄して帰りぬ。此時、関様と(ママ)御  
出になり(以下、記述ナシ)

受信 神戸藤田よりすいみつ(水蜜)桃着。  
発信 軽井沢も子え返事出す。

八月十二日 丙戌 日曜 晴。89(度)。

朝四時起て、散歩はしめる。朝八時頃、モ一時間たちて子供連て何と電話にて承知、久々  
二付嬉しくまち居たり。十時前来る、弘視、子供五人と看護婦猿丸氏と。久々の面会、一  
年へたてゝ子供の成長早き事、一番下の五男弘行よく物事わかつた(り)、可愛らしく、昨  
年乳のみ子、母の懐にのみ居たりし子也。みなく大悦ひ、学校運動場に大あばれ。此時、  
靖子、早苗も来る。お昼橋本の鰻飯を馳走する。栄子ハ少々身体異状の様子、其内ゆる／  
＼と来ると云。三時過、雨降りそふなりとて、皆々帰りぬ。靖子、早苗は五時頃雨を冒し  
て帰りぬ。

午下五時頃より雨ふり出したり。木の下はぬれかねたり。

八月十三日 丁亥 月曜 晴。88(度)。

朝四時起て、散歩して帰りぬ。自伝にかゝる。明治四十三年五月十七日より。

受信 御馬の御所より返事。

発信 神戸藤田え、伊藤よし子え、返書ス。

八月十四日 戊子 火曜 晴。85(度)。予記 竹田氏。

朝四時起。散歩して帰。来客、角田女、斎藤菊寿氏、尾田氏。

八月十五日 己丑 水曜 雨、晴。87(度)。

朝四時起。散歩して帰。また雨ふり出したり。午後、晴てむしあつく堪かねたり。伝記し  
らへる。斎藤仁子より小包にて、荒川にて撰み出し候石の数廿余計、みな面白き形、斑文  
もありて、天工の妙と賞賛いたし、早速二白き薄鉢に位置よくもりて陳列いたし候。外に  
五嘉宝と也。此夕、食事も済、庭の水まきも奇麗に出来て、新田と畑に行ませうと、庭下  
駄をはきて、如何なる事にや、沓ぬきの石にすへ(り)ころんで、小石に乳の下を打  
て起上れす。新田驚き、下女たちを呼て、大騒動。漸くして起上り、はやく床をとれと申  
て臥蓐する。井深氏を呼て手当する。格別のいたみもなく、よき安(按)梅にたをれた  
るや。この夜もかく別のいたみもなく、是も神仏の御陰(蔭)と悦居り候。

受信 齋藤仁子より文、小包物。

発信 左（齋藤）仁子え早速返事出ス。

八月十六日 庚寅 木曜 雨。 85（度）。

朝より雨もふり、かた／＼終日静養して臥蓐する。来客、齋藤仁子来りて、枕元にて大／＼驚々。然しさしたる事もなくて、種々咄して御昼前に帰られたり。

受信 神戸鶴子より返書。

八月十七日 辛卯 金曜 曇。 84（度）。 予記 故重威三十日祭。竹田氏。

朝四時起。例の散歩して帰。京都万里小路幸子さまより小包もの着。尾田氏出勤。

受信 軽井沢もゝ子、八重子、静子、寿子より。京万里幸子さまより。

八月十八日 壬辰 土曜 85（度）。

朝四時起て、散歩して帰。午下二時頃より大雨ふり出し、此雨こそ樹下迄もよくしみ渡りて、結構なる雨也。三時間位にて晴。

八月十九日 癸巳 日曜 陰。

朝始而涼氣を生し、此日こそとて車を命して、高田馬場なる津田氏を問ふ。みな在宅にて大に悦び、家を大略とゝのひたり。三年間不在二付、庭の樹木生茂り、植木職の手のかゝる事ならむ。午餐を共にして、二時頃より中野泰を問ふ。此夕ハ一宿と定めて、車を帰す。夕景、雨ふり出したり。静によく寝に就く。此夜、泰旅行より帰。

八月二十日 甲午 月曜 晴。 82（度）。

朝ハ寐ながら庭の眺望よし。近辺家屋接近して、三年前のかたちなく、發展盛也。九時より正子と同道して帰。昼飯後、正子帰る。此夜九時頃より食物に当りたりや、腹痛にて、きみを呼て、井深氏を頼み早速来診、薬用などしたれと、吐瀉もなく胸あしく腹痛のみ。一先井深氏帰宅してもらひ、其内夜八時頃、一時吐瀉沢山して、漸心地よく眠られたり。

八月二十一日 乙未 火曜 晴。 予記 竹田氏。

終日臥蓐。来客、井深氏、長尾、竹田氏。夜も井深氏来る。本日薬のみにて何も食事せず。万里小路伯御尋ね下されたり。

八月二十二日 丙申 水曜 晴。

終日臥蓐。本日よりおも湯のみ、梅肉と。朝夕、井深氏来診。本日、李子、軽井沢より帰宅。

本日は、李子軽井沢より帰る日なりとて、拂（掃）除して待居たり。電報不来、あんし

たるに、十二日(時)頃電報来る。二時過より朝倉、新田、上野え迎ひに行、三時半過、四時比無事帰着。先々安心々々。長き軽井沢の物かたりなとして。

八月二十三日 丁酉 木曜 晴。 予記 竹田氏、李子も。起たり寝たり。もはや平日の如し。

八月二十四日 戊戌 金曜 七夕祭。晴。 予記 角田氏。

来客、上海正金銀行、俣野矢太郎氏と山本氏面会。塾生俣野の父也。暫時閑談。俣野氏ハ生国大阪人にて、種々咄しあひたり。午下五時より、予、李子と角田氏に行。七夕祭の趣向、容易ならざる趣味尽されたり。人をしてみな嗚呼と叶ひたり。俳句の相摸(撲)興味あり。勝負あり。七時頃済て、食事弁当、畢而昔の写絵にて、十時済て帰。

八月二十五日 己亥 土曜 晴。 80(度)。

八月二十六日 庚子 日曜 晴。

朝より喪国旗をかゝ(げ)る。奥田氏市葬執行日。

八月二十七日 辛丑 月曜 晴。

終日、揮毫ものス。

発信 願泉寺、中田きく子え、軽井沢市村一郎え。

八月二十八日 壬寅 火曜 晴。 80(度)。 予記 軽井沢滞在之人々不残、本日十二時之汽車にて帰。

朝八時より大隈侯御病氣を御見舞する。信常様に面晤して、種々御病状を承はる。もはや此分ならば先々心配なしと医師より申されたるや、大ゐに安心して帰りぬ。帰途、鳥尾子を問ふ。一昨廿六日、軽井沢より御帰京にて、智勢子未亡人と旅行中之御咄し共にて、暫時にして帰。此朝、中村元嘉氏より電話にて、午下伺度様申越されたり。午下五時半、上野着之筈、七時汽車之延着。先々、井上八重、朝倉、鷺田静子、広はし寿子、車夫銀、無事着、可悦。秋草花、種々沢山持帰りて土産とス。

八月二十九日 癸卯 水曜 晴。 85(度)。

朝、散歩して帰。正木より河田氏え行。帰途、島田三郎君を問ふ。信子にも逢て種々咄し合、予か伝記之序文を頼み、承諾せられたり。暫時にして帰。

八月三十日 甲辰 木曜 晴。 85(度)。

朝散歩。墓参して帰。終日揮毫ものス。来客、森堯子。此夕より今度やとひ入たる畑中栄

枝女来り、寄宿舎住居となる。軽井沢の写真出来たり。

八月三十一日 乙巳 金曜 天長節。雨。

昨夜より雨にて、今日終日ふりつゝ。実に結構なる雨、可悦。来客、五島守（盛）光子、御息と。和子さま、帰塾。

受信 房州いく子より文着。

発信 端書、大口氏え。

（九月）

九月一日 丙午 土曜 二百十日。晴。85（度）。予記 実に結構なる上々天気、豊作疑ひなし。

朝四時起。李子、六時出門、七時両国より汽車にて陸地房州に行。終日、絹本張、ドーサ（礬水）引。津田夫婦、子供三人連て、誠之小学校え入学はしめに付来る。

九月二日 丁未 日曜 晴。89（度）。

朝四時起。墓参して帰。揮毫ものす。中野より正子きたる。

九月三日 戊申 月曜 晴。

朝五時起。散歩して帰。来客、津田栄子。李子、三時過、房州より帰宅ス。

九月四日 己酉 火曜 陰。

晴雨不定。朝、散歩して帰。土井早苗、京子を連れて来る。

九月五日 甲戌 水曜

晴雨不定。朝、散歩して帰。塾生大略帰塾する。夕六時より、予、李子と東京駅に津田弘視を送る。七時之汽車にて出発ス。栄子、子供四人を連れて、駅内にて夕食して帰。午早々、河田氏え行、帰途、姉小路を問て帰。

九月六日 辛亥 木曜 晴。83（度）。予記 始業式。

生徒続々来集する。八時、校長、職員、生徒一同、式場に参集ス。校長之挨拶ありて、主事、李子よりの業始の心得を懇々とへて、式全畢。残暑未だ退去せざるニ付、当分午前七時廿分より昼迄の授業とス。

受信 房州跡見いく子より父の五十日祭志白反もの着。

九月七日 壬子 金曜 晴。88 (度)。  
朝、散歩して帰。課業例の如し。

九月八日 癸丑 土曜 晴、雨。88 (度)。

朝、散歩して帰。課業例の如し。突然、土井早苗さまより帝劇招待をうけ、予、李子和四時より行。

一番 散楓恋血祭

中 奥州安達原

二番 南洋風

切 三社祭

十一時帰。

九月九日 甲寅 日曜 雨。79 (度)。予記 氷川神社秋祭。

朝散歩して帰。此夕、弘来ル。久々にて無事面会ス。先々安神。予、李子和三人にて十一時頃迄談話する。来客、跡見玉枝。房州より遺物着。石山基威、井深氏、清水、跡見玉枝え、それ／＼使にて届ける。姉小路伯来る。

発信 夙川今西え。

九月十日 乙卯 月曜 雨。70 (度)。予記 雨中、氷川祭り。

課業例の如し。絹本二葉、揮毫ス。中野正子、きたる。

受信 東天下茶や(屋) 沢田長左衛門より。

九月十一日 丙辰 火曜 雨。予記 竹田氏。

研究生稽古はしむ。廿人きたる。

受信 房州いく子より。

九月十二日 丁巳 水曜 雨。

課業例の如し。河田氏へ行。

発信 石井はつ子え。

九月十三日 戊午 木曜 雨。予記 竹田氏、二人。

課業例の如し。

九月十四日 己未 金曜 晴。80 (度)。

金曜稽古はしめ。来客、土井早苗、夕餐を饗す。

九月十五日 庚申 土曜 雨。 予記 竹田氏、李子も。  
課業例の如し。 来客、天下茶や〔(屋)〕 沢田正雄、面会ス。 午下五時より、予、李子と觀  
世夜能二行。 歌占 元滋、井筒 橋岡、安達原 義之、仕舞 数番。 十一時帰。

九月十六日 辛酉 日曜 雨。  
揮毫ものス。 此夜七時より橋岡にての研究会なから、いかにも雨しけ〔(繁)〕くて、やめ  
たり。

九月十七日 壬戌 月曜 雨。  
終日、雨降通したり。 課業例の如し。 来客、姉小路伯、大坂沢田氏、保証人を願ひ、承諾  
相成候。

九月十八日 癸亥 火曜 晴。  
はじめて空はれ渡りて、すかしくし。 火曜の稽古する、昼まで。 来客、成富初子、成富規  
矩子の母、御礼に。 姉小路伯より沢田保証記名奈〔(捺)〕印して下されたり。 志賀鉄千代。  
発信 土井田鶴え、石井初子え。

九月十九日 甲子 水曜  
課業例の如し。 午下、河田氏え行、帰途、姉小路伯え行、施餓鬼の打合をする。

九月二十日 乙丑 木曜 予記 午前九時より上野不忍池畔、化学工業博覧会開会式。  
課業例の如し。

九月二十一日 丙寅 金曜 晴。 83 (度)。 予記 午後一時、浅草本願寺に参集、協義  
〔(議)〕会。  
金曜会稽古する。 下婢くに事、御暇願出る。

九月二十二日 丁卯 土曜 晴。 予記 竹田氏、三人。  
朝、課業畢る。 午下二時より、予、李子と牛込真清浄寺二行。 姉小路御夫婦先在、良子様  
より御施主にて、故重威施餓鬼ニ会ス。 読経ありて焼香して、四時過帰。 大坂沢田正雄、  
保証書取に來りて渡ス。

九月二十三日 戊辰 日曜 雨。  
朝、墓参して帰。 帰途、浦氏ニよる。 今度の家は誠に眺望のよき処にて、わか学校と迎〔(向)〕  
ひ合たる家也。 暫時にして帰。 浅草法話会理事堀秀巖、面会ス。 来客、石井健吾、忌明御  
礼に。

李子、酒匂え行、夜八時頃帰宅。

九月二十四日 己巳 月曜 彼岸中日。雨。午下より雨やみぬ。

秋季皇霊祭。先祖祭執行。午下より、中野弘、靖、早苗、高田馬場より栄子、子供四人と来り、塾より静子、寿子さまとにて、大く賑々しく、ちらしすもしをこしらへて、夜八時迄遊ぶ。

九月二十五日 庚午 火曜 曇。

火曜研究会稽古する。来客、加藤氏、玉耀会六週(一周)年総会二付、出席願来る。

受信 信州花真君、大村梅子、石井初子、真清浄寺。

九月二十六日 辛未 水曜 曇。

ぬか雨のやうなるふる。課業例の如し。正午より河田氏え行、観世えも一寸寄、来月別会能の席たのむ。閑院宮様え参り、御息所殿下に拝謁して、種々御咄し申上て退る。それより四谷信濃町廿八番地、石山基陽氏を問ふ、此度移転の処。すま子、定栄さまに逢て、暫時咄して帰。

九月二十七日 壬申 木曜 晴、雨もあり。予記 午下一時より浅草本願寺え。竹田氏、三人。

課業例の如し。午下一時より浅草本願寺二行。会長岩倉梭子さま、野田操、予と。曾我さま病氣不参。桑門も京都より帰らず。外二輪番堀氏、今一人僧呂(侶)とにて、種々相談して帰。

九月二十八日 癸酉 金曜 先々晴。予記 今月に入て、今夜薄月をはしめてみる。

金曜会稽古する。来客、安田輝子。三時より麻布三条千代子様、御病氣を御見舞申上る。先々御快方ニ向はせられ、只今入沢達吉博士診★(言十察)(察)中にて、帰。それより麻布霞町寺内様御主人の病氣御見舞申上る。児玉夫人、大臣にも御目にかゝる。御病性(症)また(未だ)快方にも参らず、大く御心配の趣。鼻より滋養かん腸して食物を入れると申され、今日一日より急に発病にて、もはや丸一月となる、と(ど)うかコツチ物に致し度と申され候。暫時にして帰。

受信 岡山中根より鮎のかす漬着。

九月二十九日 甲戌 土曜 雨。予記 竹田氏、三人。

課業例の如し。

受信 幸島氏よりしめし(占地)着。

九月三十日 乙亥 日曜 雨。

朝より京都市準備する。扇面揮毫いそかし。来客、下瀬隠居。中野より、正子、弘、京都行二付来る。夕餐をともにして、夜八時過帰。十二時頃より雨風を交て、段々と強くなる。遂に暴風はけしく成て、所々見廻る。玄関より門前を見ると、門の左右塀尽く倒れ明放しとなる。驚て李子を呼ぶ。李子ハ塾中を見廻りて、何事もなくとて来り、二階ニ上りて見る。簾にてガラス障子を打事すさましく、破片飛散、眼も明けず。瓦斯も電気も停電、銀を呼て簾を切落させる。この困雑（難）云へからず。畳上させ、其内壁ハ落る。二時より三時の間盛也。一眠もなく警戒ス。

受信 井上角五郎氏より松たけ一籠着。

(十月)

十月一日 丙子 月曜 晴。

夜ハ明けたり。庭を見廻る。檜の木六本をし倒れ、垣根不残倒れ、草花ものみなもみくちやになる。寄宿舎もガラス破れにて、みな起出たり。学校ハ屋根瓦飛、運動場之日よけ不残倒れ、柱尽く折て惨々、隣家との境界之トタン張不残めくれたり。損害甚し。所々より見舞客来る。学校教授出来すして休業ス。光明寺主職来りて、同庭の公孫樹さけて、父の石碑にたをれ、容易に大枝を取のける事も六ツケ敷程にて、大ゐに御わひを申上に来る。然し天さいの事故、いたしかたなしと申たり。

十月二日 丁丑 火曜 予記 竹田氏、李子と百代。

課業如例。火曜の稽古する。扇面揮毫ス。来客、中の（野）より寿子。各地の被害続出。千住方面、月島惨死者の多き、小松川扇橋辺惨状、眼も当られぬと云。地方、東海道筋、中央、北陸、其外続々電信不通、停電にて蠟燭明りにて困雑（難）究（極）りなし。瓦斯も不通にて、寄宿舎、飯ハ炭火にてたき出し、是も困雑（難）。わか炊事も炭火にて大困り也。

十月三日 戊寅 水曜 晴。

課業例の如し。本日より京都市出發之筈、東海道汽車不通二付、中止（す）る。出發之前の暴風二付、大幸、仕合と悦入たり。

十月四日 己卯 木曜 晴。

課業例の如し。今夕より東海道汽車除（徐）行なから通したり。愈明日出發之準備する。午下四時過、房州より、治子、幾子着。大ゐに驚き、直ニ汽車場所取に遣す。房州よりの電報不着。

十月五日 庚辰 金曜 晴。

朝五時より起て、準備齊い、予、李子、治子、幾子之四人同行、九時半発車。送り来る者多く、御機嫌よしの声を残して出発ス。天気もよく、愉快究（極）る。名古屋（屋）辺より雨ふり出したり。京都着の頃は雨晴たり。延着九時半、御迎ひの人々大勢にて、葉室氏夫婦、勸修寺伯、嘉山梅子、中島鶴巻、元牛込幸子、万里道継、友蔵氏、姉小路より豊女。予、李子ハ嘉山氏と旅宿とす。治子、いく子ハ白川姉小路に着す。

（十月六日〜十日、記載ナシ）

十月十一日 丙戌 木曜

香山氏二泊。

十月十二日 丁亥 金曜 晴。

旅館停車場前、菊岡え一泊。

十月十三日 戊子 土曜 晴。

京都出發。

十月十四日 己丑 日曜 晴。

早朝より李子と土産物を贈る準備して、処々方々え使出ス。井深氏、手塚氏、中島先生、賀茂氏、玉枝子、新田氏、姉小路、中野跡見、石山、堀田氏、大束氏、斎藤、戸谷、角田氏、万里小路伯、塾女先生四人、女中十人、下男五人。来客、玉枝、正子、弘、晚餐を供にす。

十月十五日 庚寅 月曜 陰。

朝礼、生徒全部に逢て、皆喜々として、本日より課業例の如し。治子、いく子ハ中野え行、夕景、帰。津田栄子来る。

（十月十六日〜二十日、記載ナシ）

十月二十一日 丙申 日曜 晴。

朝、雨にて、午後より晴たり。正午より浅草婦人法話会秋季大会ニ参集す。新入会員歓迎会も兼ての大会、会集するもの七百人、新入五百人、旧員弐百人。会長岩倉綾子式辞、予、代読ス。御法主の祝文及其演舌、九条恵子祝辞御朗読、村上専精師講演アリて、全畢。外ニ余興等もなく、本日費を水害者に寄附する事。五時済て、安田氏に誘はれて日本橋倶楽

部二行、花柳勝治郎襲名の踊大会をみる。近来の踊の衣装、其外万端の花者（奢）なる事。

十月二十二日 丁酉 月曜 晴。  
課業例の如し。

十月二十三日 戊戌 火曜 晴朗。 予記 慈善演劇一等二枚、廿五日之分申受ル。  
朝五時半、巢鴨汽車にて生徒全部半（飯）能え遠足執行。余ハ不参。火曜会稽古する。畢而文展二行。朝十一時来覧者雑踏にて、とても見る事十分ならず。またの日として一時過帰。来客、津田弘視、明後廿五日、上海え帰暇乞に来る。本日之遠足会、稀なる好天気にて薩外（摩）芋掘にて、沢山に持帰。一人之故障もなく、無事安心々々。

十月二十四日 己亥 水曜 晴。  
遠足会翌日、休業。来客、手塚氏妻たき子。京都十松屋より扇子着。

受信 藤井瑞枝、巖（巖）島より画はかき着。  
発信 京嘉山氏え松茸の御礼。

十月二十五日 庚子 木曜 雨。  
朝一番汽船にて、寿子、靖子、房州え行。朝六時比より雨（降）り出し、終日降通したり。夜二入て豪雨となり。予、李子と慈善帝劇に行て帰、十一時。

十月二十六日 辛丑 金曜 晴。  
朝また雨。八時頃より空晴たり。金曜稽古する。来客、長谷川知賀子。  
発信 仙台市片平町野副とよえ画出ス。函館会所町中瀬徳定え画出ス。

十月二十七日 壬寅 土曜 晴。  
課業例の如し。  
受信 東天下茶や（屋）沢田より。

十月二十八日 癸卯 日曜 雨。  
朝より揮毫ものす。午下、万伯より電話にて、寿子、靖子、房州より乗船したれと風雨にて勝山より汽車にて帰る、万伯と同行、四時頃、芝の万伯より人を付て中野え送られたりと。

十月二十九日 甲辰 月曜 雨、陰。  
朝、小雨、後曇。課業例の如し。午下、車にて代々木大炊さまを問ふ。師前様、家政様も

御在宅にて、久々の御咄し共にて、夕景帰。

十月三十日 乙巳 火曜 晴朗。 予記 午下四時、水交社にて加茂氏結婚披露会。火曜会稽古する。午下四時より、予、李子、加茂勝子をして水交社に行。加茂正房、鈴木貞子との結婚披露会にて、余興三番二狂言末広、畢而食事開かれ、盛会也。后、余興、佐渡きつねにて全畢。月光、如鏡。

十月三十一日 丙午 水曜 晴朗。

朝八時、職員生徒参集。式場にて君か代唱歌、勅語奉読、校長、畢而本日の講話、主事講話、畢而天長節の唱歌、式畢。菊形もなか五箇ツ。来客、栄子。昼飯を共にして、予、三時過より九段に行。花の日会形況をみに行、靖国神社に詣て帰。此日ハ実上天長節日にて、風なく雲なく日本晴と云吉日也。

(十一月)

十一月一日 丁未 木曜 晴。

朝、墓参して帰。課業例の如し。住吉踊、大坂の土産、生徒其他全部え分つ。住吉明神之御託宣を李子より申聞せたり。数八百箇。

受信 天下茶や(屋)寺(沢)田礼状を。

十一月二日 戊申 金曜 雨。

金曜会之稽古する。午下、揮毫もの、夕景迄。

十一月三日 己酉 土曜 晴。

課業例の如し。午下二時より、予、下部を連れて横浜二行。原善一郎氏、此度団氏嬢と結婚之式を挙らるゝニ付、其悦ひのため原氏を問ふ。富太郎君不在にて、安子夫人に逢て、久々物語りして、祝物を贈る。浜縮緬中巾物一疋、松魚十疋と云。十日入興の筈也と云。五時頃、自動車にて桜木町迄送り下されたり。六時過、帰。閑院宮より御使者にて、両殿下御誕辰御祝宴御催被遊候ニ付、来ル十日午後四時、御招待被遊候。御服装ハ白襟紋付。

十一月四日 庚戌 日曜 雨。

朝より雨ふり出して、終日おやみなくふりしきりたり。来客、朝、秋元春興君、種々込入たる御咄し御相談に相成たり。午下、加茂東美子、正房氏、新婦同道にて挨拶に来られたり。此雨にて是迄もらぬ処、またふり始めたり。此中より屋根尽く直したれと、所詮なし。

十一月五日 辛亥 月曜 予記 愛国婦人会、新宿御苑、五日午后一時。竹田氏、李子も。

両陛下、御西下御発輦。午后早々、新宿御苑に参会ス。今般、全国慈善救済事業ニ尽力セル人々を招き、済生会、日本赤十字社、愛国婦人ノ三総裁殿下より、右事業御奨励ノ思召を以て、本日御苑に於て六百名茶菓ヲ賜り、皇后陛下より御菓子及御煙草を御下賜相成候ニ付、会長はしめ接待方請もちたり。其式有て、先三時頃、式全畢而帰。夜、月如昼。今般、物貨(価)とうき(騰貴)ニ付、職員一同ニ臨時手当として、一人に拾円ツ、を配付ス。

発信 齋藤仁子より御重箱着。

十一月六日 壬子 火曜 晴。

朝、初霜白く置たり。火曜会稽古する。来客、口羽麻子絵を取に来る。

十一月七日 癸丑 水曜 晴。 予記 五年生修学旅行発足、十日朝帰京。

朝五時、修学旅行者、出発。六時廿五分、汽車発車ス。天気上々にて心地よし。監督者、李子、八重子、春木、外よりハ上野石子、戸谷、石山、長尾氏也。先、伊勢二行。此夜ハ伊勢泊り。朝、残月如鐘(鏡)。課業例の如し。午下早々、河田氏え行、帰途觀世え行、稽古して帰。来客、大坂より横山、山口来る。折角ながら不在にて不逢。志賀鉄千代来る。

十一月八日 甲寅 木曜 陰。寒し。

朝八時より文展をみる。皆よく丹精をこらしたる絵也。中にもいかゝはしきも有り。監(鑑)別いかゞなしたるニやと思ふ。次に洋画も見る。みな特長のものなりや、疑はし。それより化学工業博覧会をみる。化学作用にて废物利用も出来、種々なるもの、外国品を仰かずとも、日本にて製造すると云事、実地にみる。十一時迄見て帰。

十一月九日 乙卯 金曜 晴。

朝より金曜会稽古する。終日揮毫ものす。修学旅行先より、生徒の絵はかき続々来る。

十一月十日 丙辰 土曜 雨。 予記 午下四時、閑院宮御誕辰参殿之事。橋岡研究会、午下六時始、融。

閑院宮御誕辰御祝献上もの、松魚大箱、保命酒こも包一箇。午下三時より宮殿え参る。御客、黒田御夫婦、安藤子、藪子御夫婦、山岸子夫婦、河鱒子夫婦、長崎夫婦、加川しつ子、余等にて始。大広間にて両殿下、若宮様、姫宮御二方、拝謁申上て、御余興、貞山講談二席、小正一手しな二席、畢而御食事、御叮寧なる御洋食はしまり、畢而別席にて御休憩、種々なる御咄し申上て、九時過全退出。雨甚し。朝六時半東京駅着電報ながら、八時過、修学旅行者一同無事帰着。此度ハすへて雨一滴なく好都合のよし、嬉し。着の時より雨ふ

り出したり。

十一月十一日 丁巳 日曜 晴。  
終日、揮毫ものス。

十一月十二日 戊午 月曜 晴。 予記 原氏結婚披露会。

課業例の如し。午下三時より、予、李子と東京駅より電車にて横浜に行、桜木町迄。原氏よりの自動車にて、三ノ溪なる新築出来之聚楽亭、淀君釣殿の館に入る。先、玄関に京都大徳寺黄梅院之門前玄関を移したる、実に雅味のあるもの也。奥え通り上段の間、十五畳、次の間、池に臨みたる池殿より右左の座敷、障子、襖、桃山時代之名画のみ、利休之好みよし、みな茶味有て淀君の遊ひ処、二階天女の間と云。雅樂之器、笙、ひちりき、横笛、みな本物を欄間ニ入れたり。床には某天王（皇）聚楽邸に行幸之時、御歌会あらせられて、寄松祝の御うた、烏丸公御筆也。琵琶を床に飾に（り）、次の間箏の琴、棚ものに音取笛など置たり。又時雨の亭とも云。二階欄干に左甚五郎の作、傘あり。みなとても拝見尽しかねたり。夫より元の家に行て、食堂開かれたり。来客ハ善一郎幼少より世話に成りたる人のみにて、医師、学校先生やら廿人計也。畢而開らく。御嫁ハ中々麗々うつくしくよき嫁らしく見えたり。十一日（時）、又自動車にて、後電車にて帰。此朝、角田君え行、はい俳（俳）諧の咄を聞て帰。  
発信 秋元春朝君え。

十一月十三日 己未 火曜 晴。

朝より火曜会の稽古する。後、揮毫もの終日。来客、宮内黙氏。

十一月十四日 庚申 水曜 晴。

課業例の如し。正午、河田氏え行、帰途観世寄て帰。来客、長野塚本ぬい、吉井文堂の娘と云。種々咄して帰。  
発信 佐藤柳子え。

十一月十五日 辛酉 木曜 晴

課業例の如し。午下、揮毫ものス。

十一月十六日 壬戌 金曜 晴。

十一月十七日 癸亥 土曜 予記 観世夜能。午後三時に帝国ホテル、増田義一。

十一月十八日 甲子 日曜 晴。 予記 浅草婦人会。

午下早々、浅草婦人会に参詣する。四時帰。

十一月十九日 乙丑 月曜 晴。 予記 長尾氏、午前より。

課業例の如し。午前十一時過より、下落合長尾氏の招に応じ、報恩講ニ付近角師を招かれて、われに決定信を得させ度との熱心より招かれたる也。精進料理にて昼飯を呼べ、説教之上にて金剛信の咄しあり。元より決定は致して居れど、いく度でも聞には結構なり。四時頃帰。

十一月二十日 丙寅 火曜 晴。 予記 午後五時、帝国ホテル。守安、白井。

朝、火曜会之稽古する。午下四時より、予、李子と帝国ホテルに行。守安滝三郎二男滝三と白井遠平氏六女淑子と結婚披露会ニ出席ス。八時過畢而帰。

十一月二十一日 丁卯 水曜 晴。

課業例の如し。午下、河田氏え行、帰途、観世え行、散歩して帰。夕六時より観世素謡会ニ行、九時帰。

十一月二十二日 戊辰 木曜 晴。

課業例の如し。

十一月二十三日 己巳 金曜 新嘗祭。晴、陰。夜雨。

新嘗会。終日、揮毫ものス。

十一月二十四日 庚午 土曜 晴。

朝、課業例の如し。来客、中島鶴巻、中村良子来る。久々に付、夕飯を柳川にて、予、李子も饗す。九時頃帰。

十一月二十五日 辛未 日曜 晴。 予記 姉小路千代子廿七回忌。

空いかにも好天気日、春日和なり。午前十時より、予、李子と光円寺に参詣ス。読経始り焼香。畢而十二時、姉小路家に行、石山吉子、すま子、跡見正子、玉枝、午餐を饗せられる。午下四時帰。此日、炊事場にて油に火入て大さわき、然し大事に至らざる、有かたし。此朝、村上専精師来られ、孫女の入学願に来る。

十一月二十六日 壬申 月曜 晴。

課業例の如し。来客、林里子、娘の入学を願に来る。白井遠平之細君、御札に来る。

十一月二十七日 癸酉 火曜 晴、風。 予記 月次素謡、午后六時始。

朝より火曜会之稽古する。午下早々、浅草本願寺に参詣する。説教聴聞ス。九条恵子様、曾我さま、御参りありたり。御退夜の御読経に逢て帰。発信 石井はつえ、中村清子え。

(十一月二十八〜三十日、記載ナシ)

(十二月)

十二月一日 丁丑 土曜 晴。 予記 釈慶淳百回忌。

朝、光円寺にて仏事執行。予、李子、正子、寿子、靖子。午下、千代子廿七回忌二付、二時より、斎藤仁子はしめ当時の親しき生徒たち廿三人を集め、むかし物語などとして靈魂をなくさめ、夕餐を饗す、夜九時頃迄。此時、雨ふり出したり。

十二月二日 戊寅 日曜 晴。

昨日の朝、仕舞にていそかし。

十二月三日 己卯 月曜 晴。

課業例の如し。本日より秋元幸子、朝十時より来られる事に相成りたり。

十二月四日 庚辰 火曜 晴。

火曜の稽古する。来客、此度縁段(談)定りたるよしにて、御礼に。

十二月五日 辛巳 水曜 晴。

課業例の如し。午下、河田より観世え行て、閑院宮に詣し、御息所に拝謁して帰。

十二月六日 壬午 木曜 晴。

課業例の如し。午下、村井氏二行、薫さまと暫時咄して、孝子老人の病を問ふ。暫時枕元にて種々咄して帰。

(十二月七日、記載ナシ)

十二月八日 甲申 土曜 晴。

課業例の如し。午下四時より村井吉兵衛氏を問ふ。氏に面晤して、学校寄附の事を頼む。速ニ承諾にて、金壹千円を請取て帰。

十二月九日 乙酉 日曜 晴。  
終日、揮毫ものス。来客（以下、記述ナシ）。

十二月十日 丙戌 月曜 晴。 予記 角田涼子の結婚披露、大松閣にて、夜八時より。課業例の如し。朝九時頃より株式取引場大火。予、李子と大松閣二行。角田涼子の結婚披露会、極々親しき人たちのみのよし。日本式料理にて美事なる馳走、可驚。十一時済て帰。

十二月十一日 丁亥 火曜 晴。 予記 竹田氏。  
火曜の稽古する。午下、揮毫す。

十二月十二日 戊子 水曜 晴。  
朝の課業例の如し。正午より河田氏へ行、観世え寄。元滋事、京都より帰らすとて、直二帰。

十二月十三日 己丑 木曜 晴。  
課業例の如し。本日にて授業納をなす。

十二月十四日 庚寅 金曜  
本日より、二学期試験にかゝる。庭の井戸改築にかゝる。午下、観世え行て帰。  
受信 酒匂藤井氏よりあめと納豆着。  
発信 小西つね子え。

十二月十五日 辛卯 土曜 晴。新聞には雨模様と云。朝より少し曇りて大ぬにあんしたり。其内晴て風もなく、好天気也。 予記 江副廉蔵嗣子隆一、大竹多気女暢子と結婚披露会。右断る。

本日午下一時より、泉会忘年会執行。午下一時頃より泉会員続々来る。講師大江スミ女史之講演アリ。家庭三従之咄し等にて面白く結構なり。スミ女史之得意の講話にて、二時間ニ渡り。夫より広庭にて餅つき、御汁粉、栗餅、五年生の撰待にて大賑はしき、点灯に相成候て、二階食堂にて、清宝の義太夫、朝比奈上使の段、面白くかんしたり。食事折詰を出して追（ママ）退散、八時過迄。仁子さんは十二時迄。

十二月十六日 壬辰 日曜 晴。  
有約而婦人世界原達平来る。午下早々、予、李子と三越え買物二行。買人雑踏にてなにも買事出来ス。驚々入たり。半襟を漸にして買得て帰。日暮也。  
受信 藤田実子より反物着。

十二月十七日 癸巳 月曜 晴。 予記 竹田氏、三人。  
歳末贈物にていそかし。朝十時過、清水総三郎氏来臨にて、予、はしめて御目にかゝりて、種々万端咄し有て、なにも決心致したり。斎藤仁子も来りて有益なる事を聞く。昼餐を出し、四人にて食事畢る。三時頃帰られたり。

十二月十八日 甲午 火曜 晴。  
朝より火曜会稽古納にて、昼迄にて済。

十二月十九日 乙未 水曜 晴。  
学校は本日にて試験畢。午下、河田氏へ行。本日納会。それより観世へ行て帰。歳暮贈りものす。

十二月二十日 丙申 木曜 晴。 予記 竹田氏、三。  
朝より揮毫ものにいそかし。来客、御使の人々にて。おし入掃除する。

十二月二十一日 丁酉 金曜 晴。  
歳末の贈り物にて大いそかし。午下早々、観世て（ママ）行て帰。夜分を賜り物にて、李子二人にて、夜十時過まで。

十二月二十二日 戊戌 土曜 晴。 予記 竹田氏、三。  
朝十時、小野田元熙氏来る、有約。朝十時、小野田氏来られ、秋元子の事にて種々咄し相談する。来客、角田栄子、植松氏。

十二月二十三日 己亥 日曜 晴。

（十二月二十四日〜三十一日、記載ナシ）